

# さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成17年度国庫補助事業報告書

鶴の部山古墳  
大串石切場跡  
一つ山古墳

2006. 3

さぬき市教育委員会

# さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成17年度国庫補助事業報告書

鶴の部山古墳  
大串石切場跡  
一つ山古墳

2006. 3

さぬき市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、さぬき市教育委員会が平成17年度国庫補助事業として実施した発掘調査並びに測量調査の報告書である。
2. 今回の発掘調査はさぬき市津田町鶴羽1483-1に所在する鶴の部山古墳とさぬき市津田町鶴羽1548に所在する一つ山古墳で、測量調査はさぬき市小田字松ヶ谷2671-92に所在する大串石切場跡である。
3. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。また、大串石切場跡の測量は㈱イビソクに委託した。
4. 大串石切場跡及び一つ山古墳の調査では保安林(保安施設地区)内作業許可を関連機関より得た。
5. 本書の編集作成は一つ山古墳を大川広域行政組合埋蔵文化財係、阿河銳二、鶴の部山古墳、大串石切場跡を大川広域行政組合埋蔵文化財係、松田朝由が行なった。また、遺物整理は大川広域行政組合埋蔵文化財係、問嶋京子が行った。
6. 鶴の部山古墳の報告で用いる方位の北は磁北で、大串石切場跡の報告で用いる北は国十座標第IV系の北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
7. 遺物観察表及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術會議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖1998年度版」を使用している。
8. 本事業及び本書の作成にあたっては、地権者及び地元各位をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)

香川県教育委員会文化行政課、香川県東部林業事務所、さぬき市シルバー人材センター、遠藤マサ子、大久保徹也、大野宏和、片桐孝浩、鎌田敬子、岡木健司、歳本晋司、真田サダ子、富田朝子、西尾明美、信里芳紀、藤川智之、藤好史郎、松本和彦、六車ふみ子、山元敏裕、山下平重、米田武子、渡部明夫

## 本文目次

### 序文

### 例言

### 鶴の部山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 鶴の部山古墳の研究史	1
第1節 大内匂谷氏の指摘	1
第2節 昭和初期から戦前の指摘	2
第3節 戦後の指摘	2
第4節 國木健司氏による指摘	3
第5節 鶴の部古墳の編年的位置づけ	3
第3章 調査の成果	4
第1節 トレーナー設定について	4
第2節 各トレーナーの状況	4
(1) トレーナー6	4
(2) トレーナー7	6
(3) トレーナー8	7
(4) トレーナー9	8
第3節 墳頂部の表面調査	11
(1) 調査の目的	11
(2) 神の基壇について	11
(3) 墳丘の現状と遺物の出土状況	11
第4章 出土遺物	14
第5章 まとめ	15
第1節 広口壺について	16
第2節 墳丘の復元	16
第3節 墳丘構築の特徴について	18
第4節 外周段築について	18
第5節 鶴の部山古墳の歴史的位置付け	19

### 大串石切場跡

第1章 調査に至る経緯と経過	23
第1節 調査に至る経緯と経過	23
第2章 調査の成果	23
第1節 石切遺構の分布とその範囲について	23
第2節 工具痕の分類	24
第3節 各地点の様相	24
第3章 まとめ	30
第1節 石切遺構の分類と特徴	30
第2節 石切場跡の時期について	31

### 一つ山古墳

第1章 はじめに	32
第2章 確認調査の成果について	32

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第11図 出土遺物(1/4)	14
第2図 トレンチ配置図	4	第12図 各古墳出土広口壺の口縁部(1/4)	16
第3図 トレンチ6平面・立面・断面図(1/40)	5	第13図 墳丘復元図(1/200)	17
第4図 トレンチ7平面・立面・断面図(1/40)	6	第14図 遺跡位置図	23
第5図 トレンチ8平面・立面・断面図(1/40)	7	第15図 工具痕A(1/4)	24
第6図 トレンチ9平面及び断面図(1/40)	8	第16図 工具痕B(1/4)	24
第7図 墳丘平面図(1/100)	9・10	第17図 全体図(1/200)	25・26
第8図 墳頂部平面・立面・断面図(1/60)	6	第18図 各地点配置図(1/1000)	27
第9図 墳頂部測量図(1/60)	13	第19図 採集瓦器柾(1/3)	29
第10図 墳頂部石材分類図(1/60)	13	第20図 石切遺構の広がり(1/1000)	27

## 写真目次

写真1 第1-1 地点木製品	27
写真2 第2-2 地点未製品	28
写真3 第2-2 地点木製品	28

## 図版目次

### 鶴の部山古墳

図版1-1 トレンチ6 上層(西から)
図版1-2 トレンチ6 下層(西から)
図版1-3 トレンチ9全景(北から)
図版2-1 トレンチ7全景(西から)
図版2-2 トレンチ8全景(南から)
図版3-1 トレンチ8断ち割り状況(南から)
図版3-2 トレンチ8断面(東から)
図版3-3 トレンチ8南端(南から)
図版3-4 トレンチ8断面(西から)

### 大串石切場跡

図版4-1 第2-4地点(東から)
図版4-2 第2-4地点(西から)
図版5-1 第2-5地点(東から)

### 図版5-2 第2-3地点(東から)

### 図版6-1 第3-2地点(北から)

### 図版6-2 第2-3地点

### 一つ山古墳

図版7-1 調査前状況(北から)
図版7-2 調査前状況(北から)
図版7-3 伐開後状況(西側斜面…北から)
図版7-4 1トレンチ検出状況(北から)
図版7-5 上段石礫検出状況(北東から)
図版7-6 下段石礫検出状況(北西から)
図版7-7 下段石礫断割状況(西から)
図版7-8 2トレンチ中央検出状況(西から)

## 鶴の部山古墳

### 第1章 調査に至る経緯と経過

#### 第1節 調査に至る経緯

さぬき市津田町鶴羽鶴部 1483-1 に所在する鶴の部山古墳は鶴部山南側の尾根上に位置する前方後円墳である。墳丘は讃岐の前期古墳に特徴的な積石塚で、県内では東限になる。

昨年度（平成16年度）、墳丘範囲の把握を目的として後円部東側のトレンチ確認調査を実施したが、今年度は反対側の後円部西側の把握を主たる目的とした。また、墳頂部積石の表面観察並びに墳丘全体図の作成を行なった。調査はさぬき市教育委員会が主体となり、大川広域行政組合埋蔵文化財係が担当した。確認調査体制は下記のとおりである。

#### （調査体制）

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長 六車 均

課長補佐 佐伯 宗澄

係長 山本 一伸

主事 鶴身 昌大

大川広域行政組合埋蔵文化財係

主任主事 阿河 鋭二

主 事 松田 朝由

技術員 多田 歩

技術員 間嶋 京子

#### 第2節 調査の経過

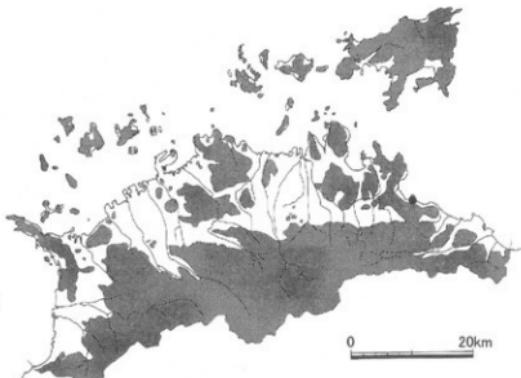
調査は平成17年10月12日から11月15日までの実動21日である。平成18年2月8日に現地説明会、2月25日にさぬき市津田公民館において報告会と徳島文理大学大久保徹也助教授の講演会が行なわれた。

### 第2章 鶴の部山古墳の研究史

鶴の部山古墳周辺の地理的・歴史的環境は昨年の報告書（さぬき市教育委員会2005『さぬき市内遺跡発掘調査報告書』）で触れており省略する。本書ではこれまでの鶴の部山古墳に関する記述をまとめた。

#### 第1節 大内盤谷氏の指摘

鶴の部山古墳に関する記述の最初は大正11年（1922）香川新報に掲載された大内盤谷氏の『津田と鶴羽との遺蹟及遺物』の連載である。このシリーズは22回に渡っているが、その中の15・16回目に鶴の部山古墳、けぼ山古墳、一つ山古墳の紹介があ



第1図 遺跡位置図

る。以下で1月29日の15回、30日の16回目の鶴の部山古墳に関する記事を掲載したい。なお、判読の困難な箇所は□で表現し、句読点については加筆した箇所もある。

#### 1月29日・15回目

『野後山塚は鶴羽鶴部山の最南端にある一見恰もケルンのやうな塚山である。西町を東に離れて県道から北を見ると鶴部山の脚が南方へズット延びた其姫端に松の木のコンモリ茂つた所があるソレが、野後山塚である。全山之石かとばかり云つてもよい位多数小石の露出して居つて私は最初一見た時には、石積塚ではないかと思つた程である。よく調査して見ると封土の剥落して自然と此結果を顕はして居るのであつた。此所にも墳上に石の祠か建てられて十人は之を野後さんと唱えておる。ノゴとは抑も何のことであろうか、私は之に就て頗る奇妙奇天列珍無口な考えを以つて居る。後に大要記す。而し野後山塚はこの野後から起つた名称であるけれども両者の間には何の縁故ない。塚の方向は東々南に築造されてあつて勿論山依古墳ではあるが其の規模は赤山塚よりズット広大である。墳丘の裾を巡らすると大小の栗石は多数封土に混じて東南西の方面には上下を通じて露出して居る。之に依つて考察すると此塚は山の尾端に当つて後方部のみ盛土して造られたるものらしい。然らば墳形は左右に小円丘の併はない前方後円墳式か或は又半円形であつたのだろう。何分剥落の程度が酷いので明瞭に墳形を認むること出来ない。殊に前方部は大部分破壊されて殆ど形式が無い位である。墓の中心は今に小石程石を盛上げ石祠の建てる所にて之は誰が見てスグ判明する。里人は此の石祠の下には宝物が埋没して居ると一般に言い伝へられる。之と同一型式の墳墓が白鳥村内にもある。善水村の川東から前山の裏山を越えて口の川へ出る道の北側の森林中である。それと之と比較するに其の地形及び構造法から規模総ての点が一致して全然同時期のものと認めらるる。……（けば山古墳について）付近に在る築石材料は皆板石ばかりである。栗石の多数なのは此墳墓をまるでに使用したもので野後山塚の現状を見ればスグ了解ができる。

#### 1月30日・16回目

……再び野後山塚に立ち返りまして野後とは全体如何なる意義かと云うにノゴは野子で野の神様ひ替ゆれば田の神様である。子とは只軽くつけた詞で田子など云ふが如し。然しそしては何も奇天列な説とは云はれないが此の野の神は九州の大隅薩摩などに

は多く祭祀されてあつて其の御神体が頗る振つたものである男子の股間にブラ下つて居る一物を表して造つた石像であると云う。積まり野後神は大隅薩摩辺では生殖神として祭られて居る。其の理由を茲に述べる□長くなるのみならず或は猥褻に渡る恐れあれば省略する。而し野の神は勿論幸の神で農災の厭勝豊穣の祈禱として祭られるのであるが男根形を以て主体とする所に其の真面目を発揮して居る。既ち之れ男勢威力を象徴した形体を以て鎮守とした信仰の事実を示すものである。……鶴羽のこの野後さんも九州辺にある田の神と同一性質で生殖神であつたのだろうと云ふのである。……

鶴の部山古墳は当時、野後山塚と呼ばれていたようである。氏の記述で注目されるのは、栗石が封土に混ざっているとする指摘で、それは今回の調査で確認された。また、墳丘の構造、立地が東かがわ市大日山古墳と類似しているとする指摘や氏独自の古墳名由来の解釈は興味深い。

#### 第2節 昭和初期から戦前の指摘

大正15年（1926）刊行の長町與彦著『津田町史』、昭和2年（1927）刊行の『大川郡誌』、には鶴羽・津田地区の古墳が紹介されているが、鶴の部山古墳の記述は認められない。一方、昭和3年（1928）『史蹟名勝天然記念物調査報告 第3』における「赤山古墳」の報告中には

「尚此の明神の敎町西北なる海岸に巖石の累々として盛られたる古墳あり古來土俗これを「ノウボウ様」と称す蓋し能褒野の義ならん。」

と日本武尊伝説との関わりを指摘し、古墳の立地に関して「好適なる墳壘の地たり」と評している。

昭和8年（1933）梅原末治氏は『讃岐高松石清尾山石塚の研究』において讃岐の積石塚として「鶴羽村ノオウ神社古墳」と鶴の部山古墳を紹介している。

昭和10年（1935）、寺田貞次氏は『考古学雑誌』25-5の「讃岐に於ける前方後圓墳」で  
「大川郡の鶴羽鶴ノ部山西南麓の古墳即ちのうご古墳のみは花崗岩砂質の地に造られた積石塚で、之れは特例の如く観察される。」

と県内積石塚における鶴の部山古墳の特殊性を指摘している。

#### 第3節 戦後の指摘

昭和28年（1928）松浦正一氏が『新修香川歴史』で紹介した県内の古墳の中に『鶴羽鶴の部山古墳』が見られる。『野後山古墳』ではなく、『鶴の部山古

墳」と記載された最初と思われる。

昭和 34 年（1959）の『津田町史』はこれまでの指摘から大いに発展した内容である。

「鶴の部山が南方につき出た低い山丘上に営まれた前方後円墳で、積石塚である。発掘されたことがなく、副葬品がないので年代がわからにくいかが、積石塚が比較的前期に多いこと及び前方部がせまく低いところから考えると、やはり前期のものであろう。後円墳はよく保存されているが、前方部は相当損じている。墳頂部に小祠がありその下に板石があるのは石室の天井石に当るものであろう。この古墳については上民の伝説に、仁徳天皇の皇后の陵であるとか、富田の茶臼山を模してつくったとかいっている。野後という地名を皇后（のうご）とよみかえて、皇后の陵といったものであろうか。」

墳形から築造時期を考察しており注目される。

その後、1960～1980 年代における鶴の部山古墳の記載された主な文献を以下に列挙する。

六車恵一 1965 「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」『文化財協会報 特別号 7』

六車恵一 1968 「讃岐における古式古墳」『古代学研究 52』

津田町史編纂委員会 1969 『改訂津田町史』

六車恵一 1972 「うのべ古墳」『さぬきの遺跡』

国方忠 1973 「鶴部山古墳」『ふる里津田の文化財』

木村義行 1976 「讃岐における積石塚の分布と形態」『香川史学』第 5 号

香川県教育委員会 1983 「うのべ山古墳」

『新編香川叢書 考古編』

大山真充 1983 「うのべ山古墳」『香川の前期古墳』

渡部明夫 1983 「讃岐における積石塚古墳の分布」『鶴尾神社 4 号墳調査報告書』

津田町史編纂委員会 1986 『改訂津田町史』

これらの諸文献で指摘されている新知見は①香川県における積石塚の東限であること、②鶴部山はかつて島であったということ、③付近の海浜の灘を利用しているためカキの付着した殻が見られること、である。なお、カキ殻は昭和 54 年（1979）に玉城一枝氏が実査で確認できなかったとしているが、今回の調査でも同様の結果であった。

この時期、注目されるのが玉城一枝氏の指摘である。昭和 54 年（1979）『香川史学』10 の「讃岐の前方後円墳」と昭和 60 年（1985）『末永先生歿呈論文集』の「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」に記載されている氏の指摘は以下のとおりである。

「讃岐最東部の積石塚である鶴の部山古墳は、かつて島であった可能性の強い鶴の部半島の低位置に独立して立地する。これなどを現地でみると、海水にさらされないために積石塚という形態をとったのではないかという、一種の制約的なものを感じさせる。（1979 年）」

「この地域に一基だけ存在する積石塚前方後円墳（鶴の部山古墳）は、かつて島であった可能性の強い半島の小丘陵上に位置するが、比高 14 m ときわめて低所に立地すること、墳丘用材は持ち運ばれた海浜の大型円礫であることなど、地理的要因を無視することのできない「阿讚積石塚分布図」の一般的な積石塚とは大きく異なる様相を呈している。」と鶴の部山古墳の特異性が指摘されている。

#### 第 4 節 國木健司による指摘

平成元年（1989）香川県教育委員会は重要遺跡確認調査として鶴の部山古墳の測量調査を行なった。調査担当者である國木健司氏は墳丘列石の下端レベルがほぼ 9.5 m に統一されていること、2 段築成であること、等の重要な指摘をしている。また、墳丘規模、現状観察は今回の調査とほぼ符合する。古墳の評価としては『撥形に開く前方部等からみて古墳時代前期でも古い段階に位置づけられる可能性が強く、津田湾の古墳群の形成、発展のみならず、本県の古墳文化形成を考える上でも欠くことのできない古墳である。』としている。

統一して、平成 2 年（1990）富田茶臼山古墳発掘調査報告書中で國木健司氏は県内の前方後円墳を類型化し、その中で鶴の部山古墳を前方部がくびれ部から細く延び端部に近い部分で屈曲し、後円部が正円形に近い形状をする「爺ヶ松類型」に分類し、「鶴尾類型」の次に位置すると指摘する。今回の調査結果では後円部がほぼ正円形になることが明らかとなり、氏の指摘にほぼ符合した。

#### 第 5 節 鶴の部山古墳の編年的位置づけ

最後にこれまでの鶴の部山古墳の時期的位置づけについて記述したい。

1985 年『季刊考古学 第 10 号』、1988 年『香川県史第一巻』の古墳編年図には鶴の部山古墳は図中に認められない。続く 1991 年『前方後円墳集成 中・四国編』では 2 期に位置づけられ、1995 年『全国古墳編年集成』では 3 世紀後半に位置づけられている。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 トレンチ設定について

昨年の後円部東側に引き続き今年度は西側調査を実施した。この節では今年度のトレンチ6～9についてトレンチの設置目的を記述する。

昨年度の調査ではトレンチ2で後円部裾を巡る石列を確認した。この後円部ラインを復元するとトレンチ1・3で確認した後円部裾とほぼ一致し、後円部東側は正円形に築造されていることが明らかとなつた。また、トレンチ1では後円部裾からさらに外側の傾斜面で石積を検出し、同様の石積はトレンチ3・トレンチ5でも確認され、各々の裾部を通る円形ラインはほぼ正円形に復元された。この後円部外側の石積はトレンチ2では確認されず、後円部のみを取り巻いている可能性が推測された。本書ではこれを外周段築と呼称する。

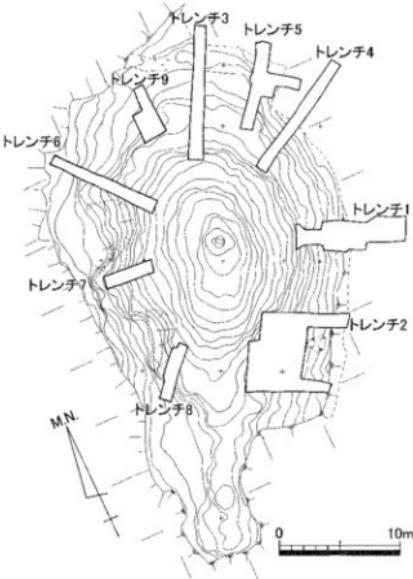
以上の昨年度の成果から今年度は西側の状況解明が目的である。現状で西側は後世の改変による地形の乱れが顕著で、露出している石積やコンターラインは梢円形を呈する。そこで、本来の墳丘が東側のように正円形となるのか、左右不対称で梢円形になるのかを目的とした。次に外周段築は、西側には現状で外周改築と思われる石積は認められない。そこで外周段築が東側のみにあるか、西側にまで巡っているか目的とした。

トレンチは昨年度のトレンチ番号に引き続きトレンチ6からトレンチ9の計4ヶ所を設定した。

西側は2ヶ所U字形の改変があり、本来の地形と推測される場所は限られている。その限られた箇所にトレンチ6・トレンチ7を設定した。

トレンチ8は西側くびれ部に設定した。現状で西側くびれ部は東側と異なり張り出し状となり、この張り出しが梢円形形状に後円部を巡るのか、造出し状の施設となるのかが問題である。その判断をするのにこの張り出しが後円部に向かって収束するか確認するのが適当であるが、その部分は後世の改変により残存しているか微妙な状態である。今回はこの張り出し部の性格をまず明らかにするため、張り出し部の明瞭な箇所にトレンチを設定した。

トレンチ9は外周段築北西部に設定した。この場所は現状で外周段築と思われるテラスが途切れており、外周段築がここで終わっている可能性があるためその確認を目的とした。



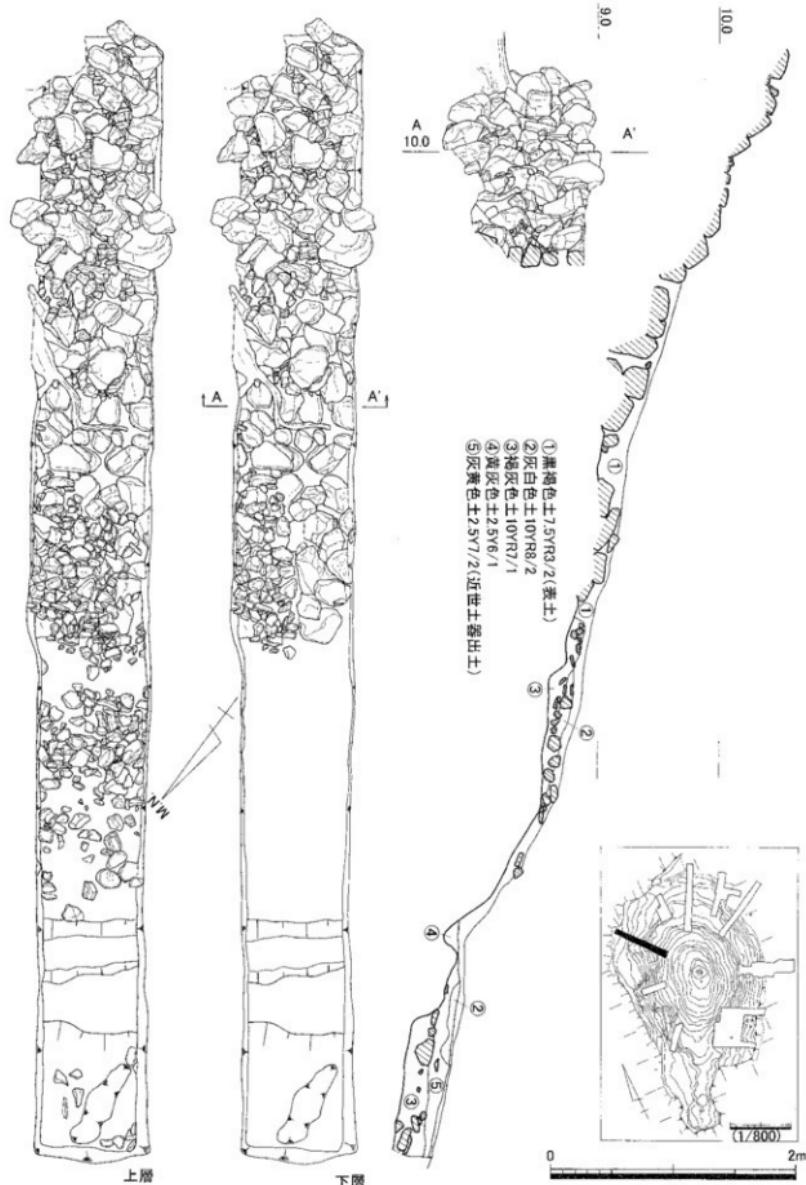
第2図 トレンチ配置図

### 第2節 各トレンチの状況

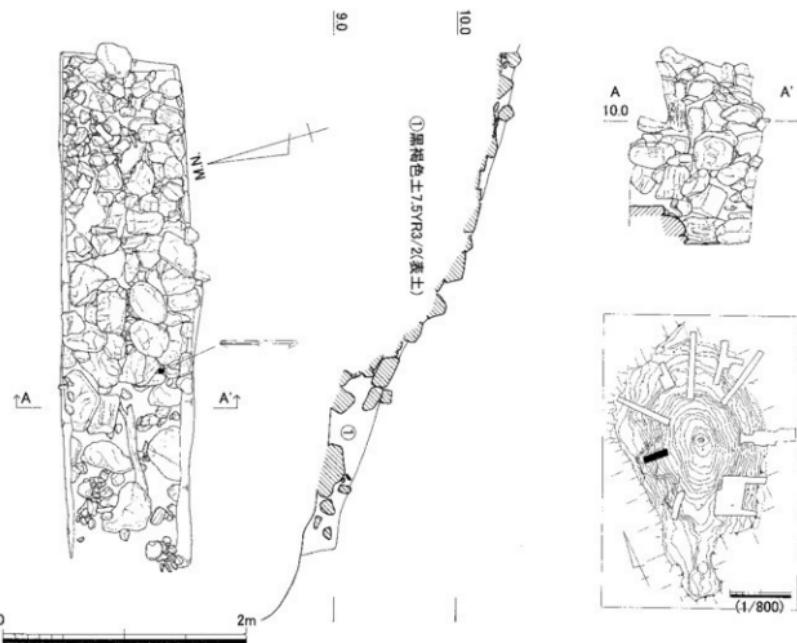
#### (1) トレンチ6（第3図）

長さ9m、幅1mで設定した。表土である腐植土を除去すると石積が検出された。石積は人頭大からややそれを上回る砾を主体とし、その間隙や上部に小礫が見られる。転落した石と位置を保つ石の判別は困難ではあるが、トレンチ東端から3m地点（以下ではトレンチ東端からの距離を～m地点と記述する）で墳丘の立ち上がりが認められる。立ち上がりは石を乱雑に積み上げており右端の石積は認められない。内部には縦に置いた砾もある。立ち上がりの手前のテラスには小口を正面に向けた石列らしき並びが見られる。北端の石材は根のために若干浮き上がっているが、この地点が後円部裾となる可能性がある。なお、この石列は標高9mの地山上に置かれている。

墳丘の立ち上り部から西側はテラス状に石積が見られ、上位に小礫、下位に人頭大からややそれを上回る砾が認められる。小礫はトレンチ東端から4m地点から7m地点にかけて顕著であるが、下位に大ぶりの礫があるのは5m地点までで、その外側は小



第3図 トレンチ6 平面・立面・断面図 (1/40)



第4図 トレンチ7 平面・立面・断面図 (1/40)

砾のみが褐色土に混ざって認められる。

砾の下位では地山がテラス状を呈している。上位に小砾、下位に大ぶりの砾の認められる4～5m地点で標高約9mを測り、小砾のみの5～7m地点では一段下がって標高約8.5mでテラス状を呈する。

7m地点から西側は地山が傾斜して下っているが途中幅55cmの溝がトレンチを横断している。溝の堆積土は黄灰色土で遺物は確認されていないが、土質からは昨年度のトレンチ3・トレンチ5で確認された近世遺物を含む溝に漿がる可能性が高く、近世段階の溝が古墳を巡っていた可能性がある。この溝から西側は20～50cm幅で緩やかに傾斜し、そこからさらに西側は擾乱による落ち込みが認められ、近世陶器片1点が出土している。

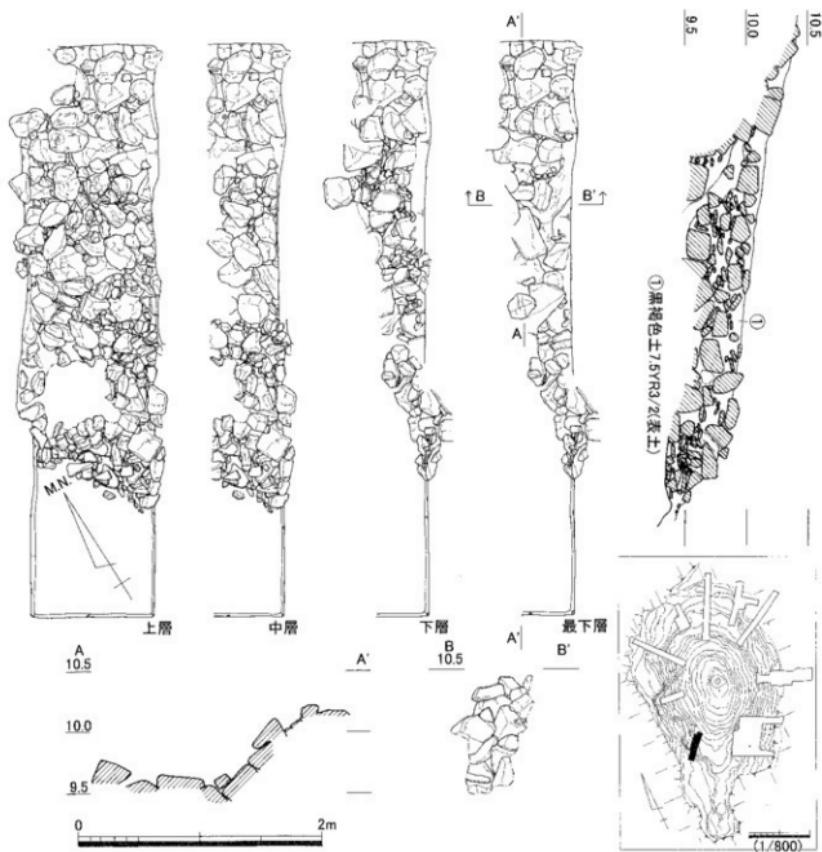
遺物は6m地点付近の小砾に混ざって土器の胴部片が5点、底部片が1点出土している。5点は胎土に雲母、角閃石が含まれ明赤褐色を呈し土器質が類似している。底部片は角のとれた痕跡的な平底を呈している。

## (2) トレンチ7 (第4図)

長さ4m、幅1mで設定した。表土である腐植土を除去すると石積が検出された。トレンチ東端から1m地点（以下ではトレンチ東端からの距離を～m地点と記述する）は石積がテラス状となり、そこから西は緩やかに傾斜している。そして、1.8m地点から急傾斜し、2.5m地点に墳丘の立ち上がりが認められる。

石積は人頭大からややそれを上回る砾と小砾となるが、1m地点までのテラスには小砾が比較的多く認められる。墳丘の立ち上がりは大ぶりの砾が目立つ。下位の砾の外側にせり出した砾があり、転落石か元位置を保つ砾かの判別は困難ではあるが、およそ2.5m地点に後円部裾が想定される。裾部の砾は標高約9mの地山上にある。立ち上がり付近には縦に置いた砾も見られるが本来のものか判断はできない。

後円部裾から西側は上位に小砾、下位に大ぶりの砾が見られるが、隙間が目立つ。これらの砾は上からの転落石の可能性があるが、すべて地山上で、堆



第5図 トレンチ8 平面・立面・断面図 (1/40)

積上には認められないことから、本来ここに置かれた礫と考えたい。

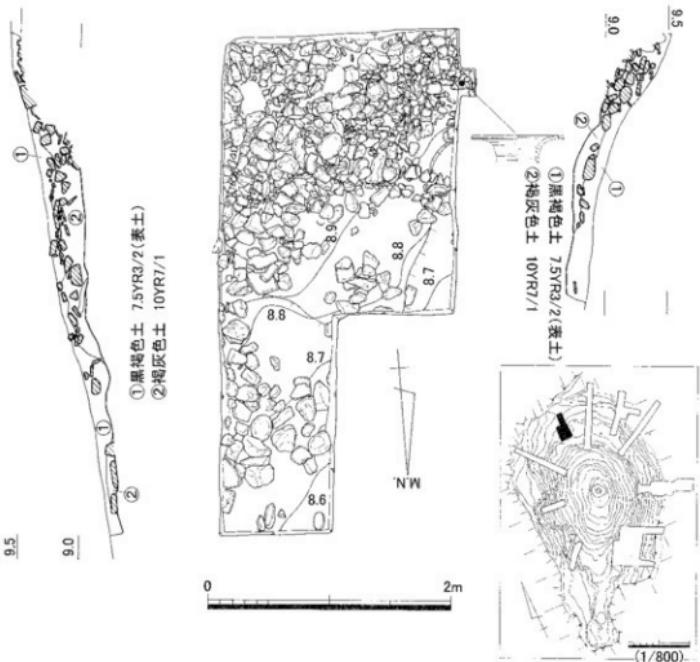
後地山はテラス状を呈し、標高9mを測る。4m地点から西は急傾斜するが、これは後世の改変の結果である。

遺物は後円部裾の石積間から広口壺の口縁部が1点出土している。また、表土やテラス部の地山直上から上器の胴部片が出土している。これらの遺物はすべて雲母・角閃石を含み明褐色を呈する。

### (3) トレンチ8 (第5図)

長さ4.7m、幅1mで設定した。表土である腐植土を除去すると石積が検出された。表土直下の石積はトレンチ北端から70cm地点（以下ではトレンチ北端からの距離を～m地点と記述する）まで緩やかに傾斜し、そこから南側はテラス状を呈し、3.7m地点まで確認できる。石積は人頭大からややそれを上回る礫を主体とし、その間隙や上部に小礫が見られる。小礫は1m地点から顕著である。

東半分のみ石を取り除いたところ、小礫下からは大ぶりの礫が水平に置かれていた。さらにその礫をはずすと再び小礫が黒色土と混ざった状態で認めら



第6図 トレンチ9 平面及び断面図 (1/40)

れ、その小礫をはずすと再び人ぶりの礫を検出した。このようにテラス部分は大ぶりの礫と小礫がサンドイッチ状になっていることが明らかとなった。

一方、水平の礫をはずすとトレンチ北側には墳丘の立ち上がりが検出された。立ち上がりの裾となる礫は水平に敷いた大ぶりの礫の上に積み上げられており、地山上に1~2石水平に積んだ後に墳丘の立ち上げを行っていることが分かった。そして、墳丘を一旦立ち上げた後に小礫と大ぶりの礫をサンドイッチ状に水平に積み、テラスを作造している。

立ち上がりは石垣状の石積は認められず<sup>8</sup>乱雑であるが、礫を縦に置いて墳丘を立ち上げている箇所が認められる。ここはテラス状の石積によってバックされていた箇所であり、古墳本来の立ち上がりの様子を示しているといえる。

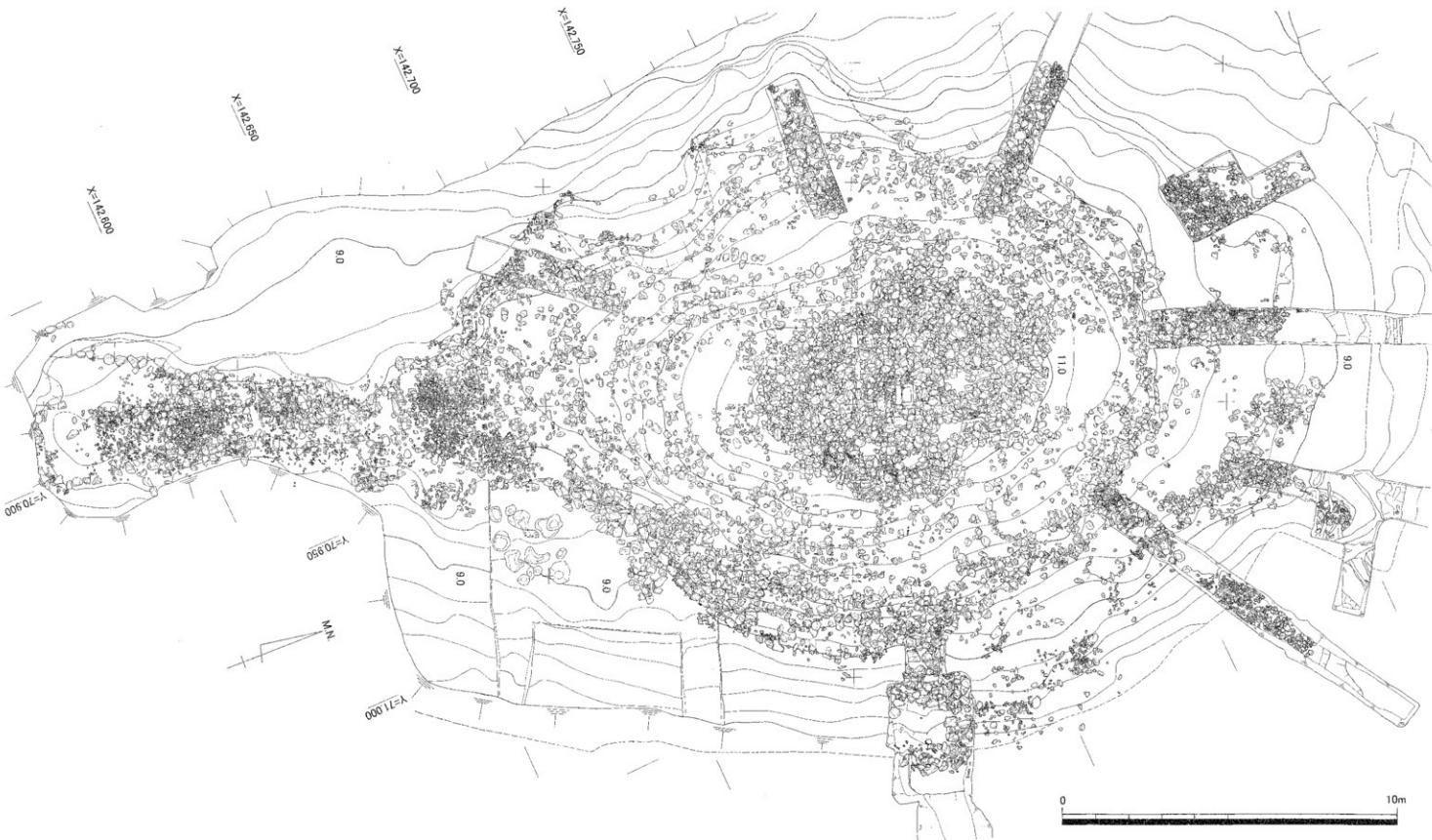
石積端は小礫を密に積み、石列は認められない。石積下には地山が認められ、検出した範囲では標高約9.4mのテラス状を呈する。地山から右積上端までは高さ約1.2mを測る。

石積の外側は岩盤が露出しており、バイラン土及び堆積土はほとんど見られない。

遺物は最上層の小礫中から十鍾と焰烙の口縁部が出土している。

#### (4) トレンチ9(第6図)

2×2.5mの方形に、東側のみ長さ1.8m、幅1m延ばした「L」字状のトレンチである。表上である腐植土を除去すると石積が検出された。石積は一面に小礫が見られ大ぶりの礫は認められない。小礫は墳端部に至るにつれて若干大きくなる。トレンチ東端と西端を断ち割り石積の様子を確認したところ、東側ではトレンチ南端から1.1m地点（以下ではトレンチ南端からの距離を～m地点と記述する）、西側では0.7m地点から南側で地山上に小礫が認められ、以北は褐灰色土の堆積土上に小礫が見られる。よって、上記の地点から南側の小礫は二次移動と考えられる。なお、現状では外周段築がこの地点において収束しているが、断ち割りにおいても内部に大



第7図 填丘 平面図 (1/100)

ぶりの礫は確認できず、遺物も確認できなかつたことから、本來のものと断定はできない。よつて、このトレンチからは当初の目的を達成することはできなかつた。

地山はトレンチ東端の小礫が地山面から認められる1.1m地点で標高約9m、以北は傾斜変換しながら緩やかに傾斜している。トレンチ西端は同じく地山面から小礫の認められる0.7m地点で標高9m、以北は緩やかに傾斜する。トレンチ北半は地山が露出しているが、等高線は石積にはほぼ並行する。

遺物はトレンチ西端の0.3m地点で小礫中から広口壺の口縁部が出土した。また、棒状土錐が小礫中から出土している。

### 第3節 墳丘の表面調査（第8・9・10図）

#### （1）調査の目的

墳頂部には豊島石製の近世の祠がある。また、祠の北側には11世紀の石造物が転がっており、中世段階はこの石造物が墳頂に建っていた可能性がある。このように鶴の部山古墳は古墳築造後、中・近世を通じて現在に至るまで信仰の対象となってきた場所である。この長い歴史の中で墳丘も幾度となく改変されてきた可能性があり、墳丘調査は古墳築造時の記録だけではなく、墳丘に刻み込まれてきた歴史を同時に検討していく必要性がある。今回はテラス状を呈する部分（一部斜面を含む）、東西6.5m、南北8mの範囲で表土である腐食土を除去し、石積や遺物の表面観察を行なつた。

#### （2）祠の基壇について

祠付近は周辺より高く、現状で高さ約0.5mのマウンド状を呈している。表土を除去したところ、長さ0.3～0.5mの長方形石材を方形に配した石列を確認した。石列は東西2.5mを測る。南北は北側が判然としないがおおよそ2.5mで正方形である。祠下には比較的多くの割石が確認でき、石室材の一部である可能性もある。基壇南東隅は若干の窟みが見られ、この場所では石列が確認できない。基壇構築後に盗掘を受けた可能性があり、基壇の前面には大ぶりの礫が投げ出された状態で散乱している。また、祠の東側には0.5×0.3mの割石がある。この石については堅穴式石室の天井石ではないかとする意見がある（津田町史 1959）。

祠直下には白色凝灰岩の塊片が見られる。祠の北側にある石造物とは若干石質が異なるが、かつて墳頂部に建っていた石塔片である可能性が高い。

以上、この基壇は中世石造物が墳頂から転落し、

新たに近世段階に祠が建てられた時に造られた可能性が有力であるがその具体的な証拠は不十分である。

なお、祠の石材である豊島石は祠周辺を中心半径3m内に破片が散乱している。

#### （3）墳丘の現状と遺物の出土状況

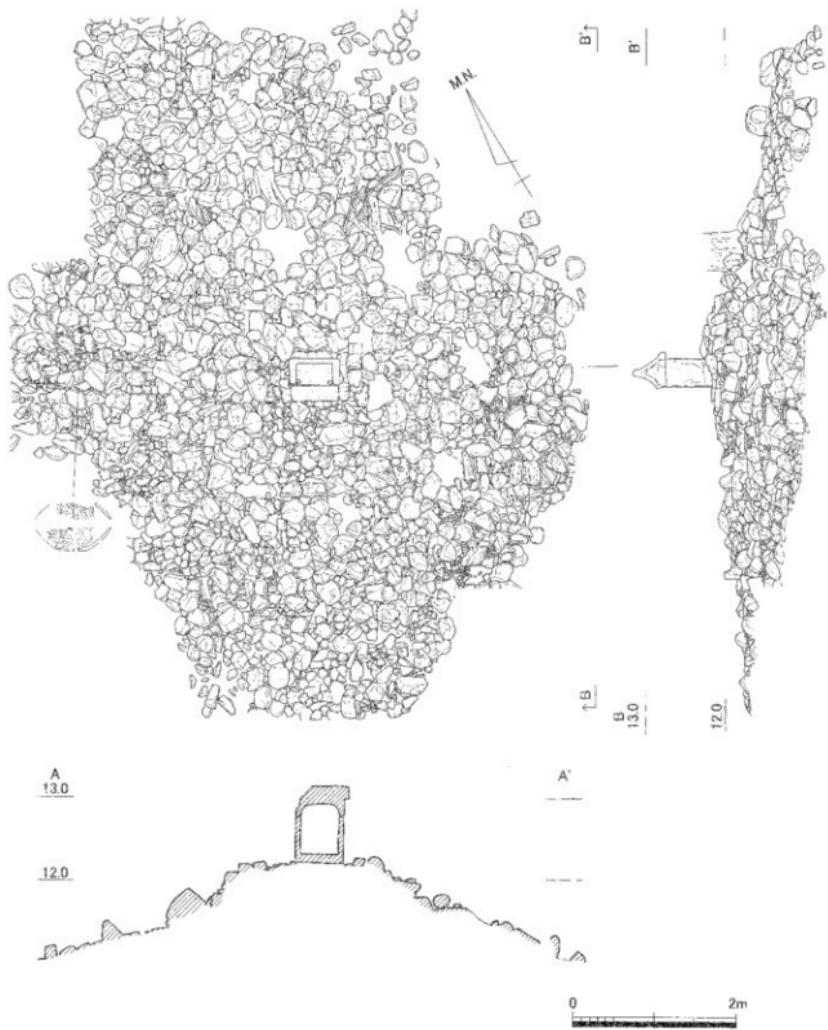
石積は祠以南と以北で状況が異なり、以南では人頭大的礫に加えて多くの小礫が確認できるのに対して、以北では小礫は少ない。小礫の一つである割石も同様に祠以南に集中しており、特に祠正面から南約2mの地点に密集している。この付近では小礫中に近世以降の陶器片も散乱している。一方、北側は人頭大的礫を主体として比較的均一である。また、標高11.3～11.5m間で広くテラスを呈しており古墳本来の墳頂平坦面と考えたいところであるが問題もある。一つは祠北の右造物の断片がテラス面から約0.1m下位の石積中で確認されている。もう一つは、祠の西で出土した広口壺も周囲のテラス面から約0.3m下位の標高11.1mの礫中で確認している。現状の石積表面で上器片がほとんど確認できなかつたことも考慮すれば、本来の墳頂平坦面はさらに低い標高11m付近であった可能性もある。墳丘部を側面から見た立面図からは標高11.5m付近に横目地が見られた。この点も今後の検討課題としたい。

ところで祠の東2mの傾斜面には長さ0.7m、幅0.3mの範囲で地山のバイラン土を入れた箇所がある。掘削していないため、判然とはしないが、土は厚さ数10cmほど入れられおり、その下位には再び礫が認められる。この部分の直上は基壇の基礎となるテラス面で礫は水平に敷かれている。今後の検討材料である。

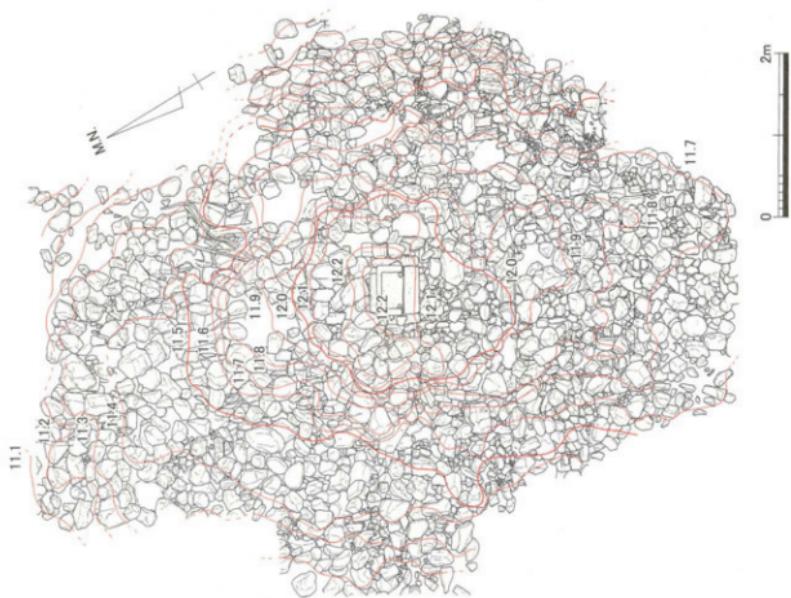
遺物は広口壺片を2ヶ所で確認している。2ヶ所ともに石積表面から数10cm中の出土である。また、近世以降では寛永通宝1枚と陶器片が数点散乱している。

### 第4節 墳丘平面図について

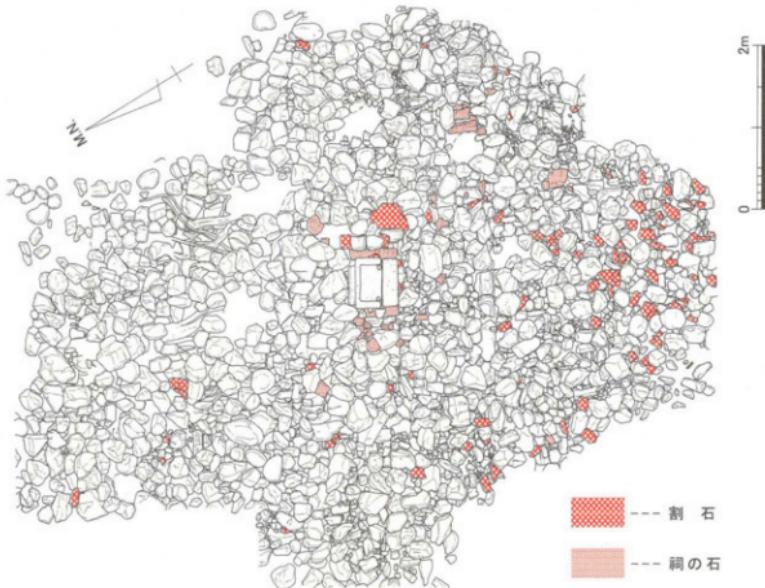
昨年は先端が崩落危機にあった前方部の沿線保存として前方部の平面図及び東側立面図を作成した。今年度は全体の積石状況を把握するために後円部並びに外周段築部の平面図を加え、墳丘全体の平面図を作成した。また、各トレンチの平面図も全体図の中に入れてある。



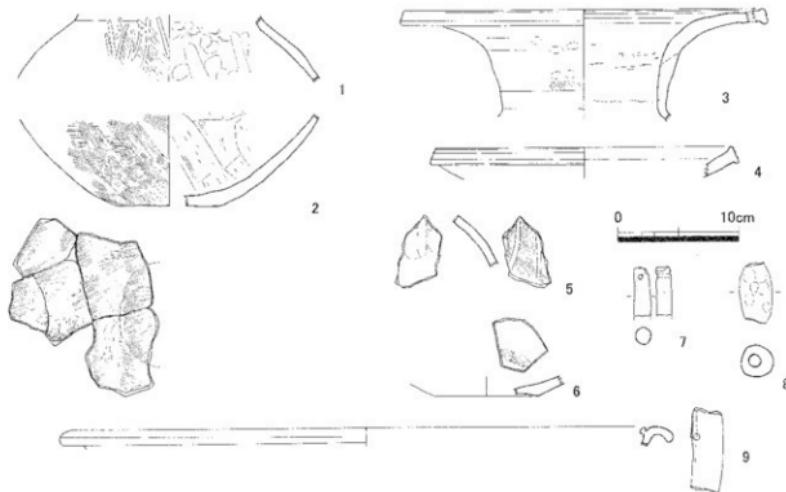
第8図 墳頂部 平面・立面・断面図 (1/60)



第9図 填顶部 測量図 (1/60)



第10図 填顶部 石材分類図 (1/60)



第11図 出土遺物 (1/4)

## 第4章 出土遺物

昨年度は各トレンチにおいて弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の土器片が出土したが古墳の築造時期を断定する決め手を欠いた。

一つには器種が壺、甕、鉢、高杯などさまざまであったが、讃岐の古墳でしばしば確認される広口壺が皆無であったためである。もう一つは、ほぼ同時期の上器片が古墳のベース土中からも出土し、古墳に先行した上器片の存在が明らかになったことである。このことは、石積上の遺物も古墳に伴わない可能性があり、古墳築造の上限を知るにとどまった。

今年度はようやく、広口壺が出土し、確実に古墳に伴う遺物が確認できた。器種の不明確な土器片も含めて数10点を確認したが、昨年度と大きく遺物の傾向が異なる。

昨年度は器種の多さに加えて、土器質もさまざまであったが、今年度は広口壺と判断できるものが多く、上器質もほとんどが胎土に雲母、角閃石を含み、明赤褐色を呈している。

このような違いは墳丘東側と西側の堆積土の違いと関わっている。昨年度の墳丘東側は石積上とともに、古墳のベースで二次堆積土である褐色土から多

くの上器片が出土した。今年度の墳丘西側では東側のような褐色土ではなく、直下に花崗バイラン十の地山が確認され遺物はすべて石積から出土した。この褐色土は古墳築造前の堆積土であり、それが東側のみに見られるということは、古墳築造の地山整形時に削り出した土を東側斜面に下ろした可能性が推測される。このことから古墳築造前に遺物が後円部東側で顕著に確認できたのである。

なお、古墳築造後の遺物も少數ではあるが出土した。以下では個別的に遺物の特徴を記述する。

図示した古墳に伴う土器（1～5）はすべて胎土に雲母、角閃石を含み、明赤褐色を呈する。1・2・5は墳頂部からの出土である。祠西側の石積表面から約0.3m下位の標高11.1mの腰中で確認した。広口壺の底部と胴部の土器片11点あり、内5点が底部付近で接合した。1は胴部上半である。上端が頸部との境で屈曲が認められる。頸径約15cmを測る。外端は左上がりのハケと幅3mmのヘラ磨きが見られる。ヘラ磨きは放射状に反復している可能性がある。内面は指ナデ、指押さえが見られる。5は外端に幅5mmとやや広いヘラ磨きが見られるが、1と同一個体と思われる。ヘラ磨きのある土器片は他に1点確認できる。2は1・5と同一個体である可能性があるが、接合關係はない。底部から胴

部下半である。底部は角のとれた平底で径8cmを測る。底面はおよそ1/3残存しているが、穿孔の痕跡は認められない。外面はハケ調整のみで、胴部上半で確認されたヘラ磨きは確認できない。ハケ調整はまず、水平方向に施し、次に左上がりに施している。底部外面は胴部のハケを施した後にナデ調整し、その後全面にハケ調整している。内面はやや焼成不良である。左上がりのケズリが見られ、所々にハケが残る。

3はトレント9の小礫中から出土した広口壺の口縁部である。口径は約30cmに復元された。口縁端部も確認できるが、頸部と接合せず、ナーラインから復元した。口縁端部は幅約1cmでナデによる上下の拡張がわざかに認められる。外面は左上がりのハケがかろうじて見られるが、指押さえが目立ち、粗雑な調整である。内面も同様に接合痕が残り粗雑な調整であるが、頸部上半は丁寧なナデが見られる。胴頸部の屈曲部に対して頸部下半の器壁が著しく厚い。

4はトレント7の石積中から出土した広口壺の口縁部である。口径は約24cmに復元された。端部を上下に大きく拡張し、幅1.5cmを測る。端面には幅約3mmの浅い凹線が3条見られる。口縁部上面は丁寧なナデが見られるのに対して下面調整は粗い。

6はトレント6西端の攢乱から出土した近世陶器である。底径8.4cmを測り、底部は上げ底である。外面にはケズリ調整、内面には砂目が認められる。

7はトレント9小礫中から出土した棒状土錐である。幅14cm、長さは3.9cm残存し、一方は欠損する。端に径約4mmの穿孔が認められる。

8はトレント8小礫中から出土した土錐である。中央の膨らむ紡錘形である。幅最大部約2.7cm、両端1.6cm、長さ約5cmを測る。外面には指押さえが顕著に認められ、内部は径1cmの穿孔が認められる。

9はトレント8小礫中から出土した焰焰の口縁部である。口径50cmに復元された。

## 第5章 まとめ

### 第1節 広口壺について

今回、トレント7・9、墳頂部で広口壺片が出土し、トレント6においても広口壺の可能性のある体部片が出土した。これらすべて共通して胎土には雲母、角閃石が多量に含まれている。この節ではこれまでに先学によって指摘されている広口壺の形態変遷から当古墳出土広口壺の時期を位置づけ、古墳築造時期を明らかにする。

讃岐地方の弥生墓・前期古墳では、在地系の広口壺がしばしば墳丘及び主体部で見られ、本地方前期古墳の特徴となっていることが大久保徹也氏によつて指摘されている（大久保 1993）。氏はこれら広口壺が日常的な広口壺と同巧の形態で、本来の形状からより儀器化した壺形埴輪とは一定の格差があるとしながらも、用途、古墳への位置づけからは埴輪と同列に扱つて構わないと考えている（大久保 1996）。このような広口壺は県内でさらに数タイプに細分できるが、その中で当例のような口縁部が体部から緩やかに外反して開くタイプには丸井古墳を典型例として、稲荷山古墳、姫塚古墳、六ツ目古墳、等がある。

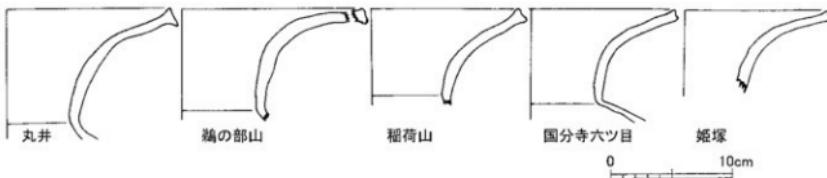
広口壺の形態変遷として大久保徹也氏は下川津V式古墳に口縁部模様帶が発達し、VI式には全く残らないことを指摘している（大久保 1990）。

次山淳氏は『川上・丸井古墳発掘調査報告書』中で口縁端部が上下拡張するものから、上方だけに肥厚するものへ、体部形態において最大径位置が体部上位にあり直線的な肩のはるものから丸みをおびてゆるやかにふくらむものへ、最大径位置が下がり全体に球形化に進むことを指摘し、丸井古墳出土例を下川津V式としている（次山 1991）。

大久保氏は再びこの広口壺の形態変遷として体部の球形化と口縁端部の退化を指摘している。口縁端部は下川津V式に上下拡張していたものが、VI式以降に端部下端が縮小し口縁端部が退化するとしている（大久保 1993）。

森下英治氏は国分寺六ツ目古墳の報告書の中で広口壺の変遷を検討している。変化的要素として、①底部の膨らみ、②口縁部の矮小化、③縦位ヘラミガキやスリナデによる二次調整の増大、を指摘している（森下 1997）。

以上の諸特徴に着目して、当出土広口壺を位置づける。そこで、丸井古墳と稲荷山古墳出土例を比較



第12図 各古墳出土広口壺の口縁部 (1/4)

資料とする。なお、この両者の時期的関係は口縁部形態から丸井古墳例から稲荷古墳例への変化が指摘されている(大久保1993・山元1996)。

まず、口縁端部の形態は上下に大きく拡張する丸井例に対して鶴の部山例も同様に上下の拡張は認められる。ただ、その幅は遺物番号4が1.5cmと丸井例の1.6cmとはほぼ同じであるが遺物番号3は1cmで退化現象が指摘できる。また、端部のナデは強くナデている丸井例に対して鶴の部山例は幅狭のよわい四線が3条認められる。また、口縁部上端が頸部からなめらかにつまみ出されている丸井例に比べて鶴の部山例は端部のみ強くつまみ出している。総じて鶴の部例に口縁端部の退化が認められる。一方、稲荷山例は大久保氏が指摘しているように上端部のみ軽くつまみ出している。以上からは丸井例→鶴の部山例→稲荷山例の組列が指摘できる。

次に体部外面は丸井例がハケを主体としているのに対して鶴の部例はハケの後に継ぎのヘラミガキが認められる。稲荷山例は細片のため詳細は不明である。ここから丸井例→鶴の部山例の組列が指摘できる。

底部は丸井例と鶴の部例のみで確認できる。丸井例は平底だが、中心に向かってやや突出しているのに対して、鶴の部例は完全なる平底で丸井例のような突出は認められない。底部の状況からは鶴の部山例の方が古相である。

以上からは総体的にはおおよそ丸井例→鶴の部山例→稲荷山例の組列が指摘でき、時期的にはおおよそ下川津V～VI式期が想定される。なお、鶴の部山例は胎土に雲母、角閃石を含む点で丸井例や稲荷山例と共に共通している。

註) 大久保徹也氏からは口縁部形態、調整方法から丸井古墳より新しく、野田院古墳より古いとするご教示を賜った。

## 第2節 墳丘の復元

この2年間の調査で後円部の規模・形態がおおよそ判明した。前方部は確認調査を行なっていないが、墳丘周囲に二次堆積土がほとんど認められず、岩盤

の露出した箇所も多いことから、現状の石積の様子から墳丘全体の復元を試みたいと思う。

まず、昨年度のトレンチ2では後円部を通る石列が検出された。石列はトレンチ北端から13石目まで円形状に巡っており、13石目は大ぶりの礫、その手前は13石目の礫にもたれさすように斜めに置かれていた。この13石目から南は石列が不明瞭となり、また、石材は前方部中央に向かってぼまっていることから、この地点がくびれ部であることが判明した。

さて、この石列はトレンチ2の調査区外においても6石程確認でき、同様に円形に巡っている。石列の長さは6～7mでここから円の中心を導き出すと、墳頂にある祠の正面に当たる。この中心を軸に右列を通る正円を復元すると昨年度のトレンチ3では後円部の立ち上がりと推察される地点にはほぼ一致し、トレンチ1・トレンチ4では現状で確認できる後円部裾のテラスの東端にはほぼ位置した。このような結果から、昨年度の時点で後円部東側は正円形を呈し、現状は部分的に後世の改変を受けていることが判明した。

今年度は後円部西側にトレンチを設定した。後円部西側は現状で地形や石積は梢円形を呈していたが、調査の結果、トレンチ6・トレンチ7でおおよそ後円部の立ち上がりと判断された場所は昨年度復元した後円部東側の正円形ラインの延長上にはほぼ一致した。このことから後円部は正円形となることが判明した。

次に昨年度のトレンチ1では後円部の裾よりさらに外側の傾斜面においても石積を確認した。この石積はトレンチ2では確認できなかったが、トレンチ3・トレンチ5では同様に認められた。また、トレンチ4でも同様の石積はあったが、下面から近世遺物が数点確認されたことから後世の改変と判断している。この石積の端部はどのトレンチにおいても明確な石列は見られず後世の改変も想定された。ただ、トレンチ1の石列端部を通る円形で復元するとトレ



第13図 填丘復元図 (1/200)

ンチ3・トレント5の石積端とほぼ一致したことから、後円部のさらに外側に円形に巡る石積の存在が想定される。本報告ではこれを外周段築と呼称する。外周段築の詳細は後の節で記すため、この節ではおおよその規模、形態について記載したい。

後円形部西側は後世の地形改変が大きかったが、後円部裾からさらに外側に石積が確認でき、西側も同様に外周段築の巡ることが明らかとなった。ただ、その範囲についてはトレント6・トレント9で正円形の復元ラインにはほぼ一致するものの、トレント7は約1.5m内側で終わっており、後世の改変が推察される。外周段築が本来正円形を呈していたかさらに検討が必要であるが、今回は正円形で復元案を提示した。

トレント7から南では外周段築の復元ラインは現状で確認できる小段の石積端に一致する。この場所は西側くびれ部で東側と非対称で若干の張り出しを呈している。昨年度はここから横円形状に後円部に繋がる可能性と、張り出し状になる可能性を想定したが、調査の結果からは外周段築の一部である可能性が高くなつた。この場所に設定したトレント8では、トレント北端付近で石積の立ち上がりを確認し、墳丘を築造した後にテラス状に石積をして外周段築を築造したことが明らかとなった。トレント8からさらに南側では前方部から明瞭に屈曲する地点が認められるが、これが前方部と外周段築の接合部と考えられる。なお、外周段築の端は昨年度同様に明瞭な石列は認められず、トレント8では多量の小段が地山上に積まれている。

くびれ部は昨年度確認した地点を墳丘主軸から西側に反転させるとトレント8の北西端に復元できる。前方部は現状の石積からの復元であるため、改変の度合いによって大きく形態の異なることが推測される。

墳丘の各法量は以下のとおりである。

全長約37m、後円部径約17m・高さ約3m、外周段築幅約3m、くびれ部幅約8m、前方部長約17m・幅約5m・高さ約0.5m。

後円部径と前方部長はほぼ同値で、くびれ部は後円部径のおおよそ半分である。また、前方部は著しく低平である。

### 第3節 墳丘構築の特徴について

昨年度トレント3・4・5では石積直下のベース面がおおよそ標高9mであった。また、前方部は現状で標高9~9.5mであり、古墳築造に際して土台

として広く平坦地を整形した可能性を指摘した。今年度も同様にトレント6・7・9で石積直下は標高約9mであった。また、前方部と外周段築に位置するトレント8では外周段築端は標高9.3mを測り、また、前方部西側は標高9.3~9.5m上に石積が認められる。このように後円部西側も同様に土台の可能性が想定され、また、後円部に対して前方部が若干高いことも判明した。ただ、その差は最大でも50cmで、全体的にはかなり水平に整形しているといえよう。

こうした中、後円部東側のトレント1は例外で後円部裾が標高8.5m、外周段築端が7.5mを測り、最大で2mの比高差がある。これは後円部東側が土台下の傾斜面まで墳丘が及んでいるためであり、この点については外周段築の節において記述したい。

最後にベース土について若干の指摘をしておきたい。昨年度は古墳のベースとして花崗バイラン土と花崗バイラン土上の二次堆積土である褐色土を指摘した。トレント2の断面によりこの褐色土中から様々な胎土・器種の土器片が山上し、古墳築造前に何かしらの遺跡が形成されていた可能性が想定された。この褐色土はトレント1では、石積の石材間に充填されており、さらにトレント1・トレント2では石列や石積下のパラスと混ぜて敷かれており褐色土の意図的な使用が見受けられた。一方、今年度の調査ではこうした褐色土は確認できず、石積直下で花崗バイラン土となっていた。こうした状況と関連するのか、今年度の遺物はおおよそ胎土・器種がほぼ共通し、多くが古墳に伴うと判断された。よって、古墳築造の地山整形により生じた土が主に墳丘東側の墳丘構築に使用された可能性が推測される。

### 第4節 外周段築について

法量、形態については第2節において記述した。ここでは再度諸特徴についてまとめ、その性格について検討したい。

外周段築は後円部を幅3mで取り巻いている(註1)。トレント8南東では前方部から強くくびれて屈曲した箇所があり、外周段築が前方部を周らずそのまま前方部に取り付く状況が推察される(第2節にて説明)。ところで、昨年度、トレント2の右列前面には人頭大から拳大の集石が認められた。この集石はすべて花崗バイラン土や褐色土上にあり、転落石ではなかったが、下位には埋葬施設らしき掘り込みはなく、その性格については課題であった。今回、西側くびれ部の張り出し状の石積が外周段築の

一部である可能性が高くなり、これらの石材も同様に外周段築の残存である可能性が高いと考えたい。おそらく、本来は東側くびれ部も同様に外周段築が前方部に取り付いていたと思われる。

次に段築の様子を詳細に見ていくと、後円部北・西側がテラス上に石積しているのに対して東側は傾斜面となっている。これは第3節で触れたように、東側では土台下の傾斜面にまで墳丘が及んでいたためであり、側面観は東側と西側では大きく異なっている。外周段築の機能として同様の施設をもつ鶴尾神社4号墳では石積外の自然地形に石積し墳丘を視覚的に大きく見せようとした意図があると指摘されている（歳本 1995）。本墳に同様の意図を当てはめるならば、東側からの側面観を意識した造りと評価できる。現在は鶴の部山古墳周辺は陸地化しているが、当時は現在より海が入りこんでいたと思われ、特に古墳の西側はすぐ近くにまで海が接していたものと推測される。船からの視覚を考えた場合、西側の側面観が重視されると思われるが、事実は東側の側面観の方が大きく見える。また、東側くびれ部では石列が丁寧に巡っていたが、北・西側では同様の石列は確認していないことからは、墳丘構造においても東側は他と異なっていた可能性がある。東側はそのまま北東に行くと一つ山古墳、けば山古墳に迫り着く。古墳時代当時この地がどの程度陸地化しているか明らかではないが、鶴の部山古墳東側に津田地域に通じる交通路のあった可能性が推測される。ただ、現段階では可能性の枠を出ないことは否めない。外周段築の性格ももう少し検討する必要がある。例えば、鶴の部山古墳周辺の現状の地形を見ると、古墳西側はかなりの急傾斜を呈している。墳頂平坦面に制約があり、それよりも大きな墳丘を築造する必要のある場合、西側よりは傾斜の緩い東側に墳丘を降ろす方が合理的である。当時の船の進入路も含めて今後の課題である。

次に外周段築部分の石積は各トレチにおいて表土下で小礫が確認できた。小礫は10cm程度の塊石や割石が使用されている。そして、この小礫の下位には拳大から人頭大の礫が認められる。調査ではこの小礫が古墳本来のものか検討を要した。後後に小礫が敷かれたとする可能性としてトレチ2、トレチ3で墳丘変更を受けた箇所にも同様に認められる点、トレチ9において広口壺が小礫中から出土したことが指摘できるが、小礫であれば多少の攪拌は想定される。現段階では同様の小礫が徳島県萩原1号墓でも認められることから当古墳も当初のもの

と推察している。

萩原1号墓では墳丘構築にあたって長幅30~40cmの砂岩角礫を石列とし、右列内部に同様の礫を据え、その上は砂岩小礫で厚さ40~50cmで被覆しており鶴の部山古墳の外周段築や前方部と同様の構造となっている。なお、萩原1号墓とは石列下に土を入れて礫を安定させている点や墳丘に封土が一部使用している点でも類似性が指摘できる（註2）。

註1) 復元図では外周段築を幅3mの正円形としたが、所定に至るまではもう少し詳細な調査が必要である。この外周段築が特に後円部北から西側において複数の張り出し施設となる可能性があることを木村健司氏からご教示賜った。

註2) 上記の石塚は平城一枝氏によって描画谷9号墳、横立山塚古墳が指摘されている。

## 第5節 鶴の部山古墳の歴史的位置付け

本報告のまとめとして津田湾沿岸の古墳群における鶴の部山古墳の位置づけを考えたい。

津田湾沿岸の古墳を最初に取り上げたのは第2章でも触れた大内鶴谷氏である。1922年香川新報で『津田と鶴羽との遺跡及遺物』『津田町羽立峰山麓に在る竪穴式小石室の古墳』が連載されている。この中で津田湾沿岸の古墳について竪穴式のみで横穴式が認められないとする注目すべき発言をしている。また、この地区に吳人が居住していたという意見を提出している。

その後長らく当地域に注目した論考は認められないが、1965年当地区古墳の重要性を指摘した画期的な論文が六車恵一氏によって提出された。氏は農業生産の望めない当地に前方後円墳が5基もあり、しかも大多数が前半期古墳であることに注目した。地理的環境において農業の比重よりも海運、停泊、水産等の港町的な面が経済的主体となったとし、前半期で古墳が終焉する点に関しては豪族間の闘争による新興豪族の台頭で没落したためとした。また、当地は割合早く大和朝廷の配下に入ったとし、開墾等のため土木技術の導入が必然的に要請されたことがおおきな要因と考えた。続いて1968年、「讃岐における古式古墳」では讃岐の古式古墳の特徴として削抜式石棺を挙げ、大川郡の相地産の凝灰岩、つまり火山の白粉石の存在を指摘している。氏の指摘はその後の津田湾沿岸の古墳評価の基礎となる（六車1965・1968）。

津田湾沿岸の古墳群と海との関わりを示すものとして2000年、古野徳久氏は津田湾沿岸の古墳群の出土遺物に貝製品や漁具など海との関わりをも

つ遺物のあることを指摘している。中でもイモガイ製品は南海交易の一端を示すものである（古野 2000）。

海上交通に関しては 1966 年西川宏・今井亮・是川長・高橋謙・六車恵一・潮見浩氏による『日本の考古学』の「瀬戸内」の中で倭の朝鮮侵略という事業とともに盛衰をみたとしている。また、当地が在地首長層と倭政権との直接の接点の場であったと指摘している。これに連関して、間壁忠彦氏は津田湾のような沿岸首長は内陸平野の首長よりも強く大和政権と結び、海上の要地支配とともに、平野部への大和政権支配についても一定の役割を果たした面があると指摘する（間壁 1970）。

このように沿岸首長の特殊性が指摘される中で岩本正二氏のように津田湾古墳群の成立基盤は旧寒川郡の平野部とする意見もある（岩本 1972）。

さて、津田湾沿岸の古墳群を考える場合、山を隔てた南側にある宮田茶臼山古墳の存在は大きい。六車恵一氏は津田から大川町にまたがる古墳群が国造的な小国家の奥津城としている。津田と大川に並存していた勢力が富田茶臼山古墳の出現によって完全に分立小国家連合の長として東讃に呑嚥したと指摘する（六車 1965）。岩本正二氏は津田湾沿岸の古墳群が衰退しようとする時に突然として富田茶臼山古墳が出現するとしている（岩本 1972）。六車氏は 4 世紀後半において津田湾沿岸の古墳群が大和的葬送儀礼と祖靈観念の勢力圏に組み込まれると指摘している。津田湾が大和朝廷の國土統一と半島進出の拠点であり、大和朝廷の国上統一によってその機能が弱まった段階で農業を基盤とした富田茶臼山古墳の被葬者が出現したとした（六車 1978）。

広瀬常雄氏は複数の有力首長からなる津田湾沿岸の古墳群の力の結集が富田茶臼山古墳を築造し、有力集団は富田茶臼山古墳周辺に移動した可能性を推定している（広瀬 1983）。これに関する古野徳久氏は生産基盤の異なる人間の内陸への移動を考えにくいとし、富田茶臼山古墳の出現を畿内勢力の新たな段階の進出としている（古野 2000）。

玉城一枝氏は讃岐地方の前期古墳の多くが中心主体を東西にとる中で津田湾沿岸の古墳群は南北を示し、削抜式石棺の形態や石材、積石塚のあり方など古墳文化全般に対して独自を有していると指摘した（玉城 1985）。

こうした津田地区の特殊性に対して古瀬清秀氏はさらに豊富な副葬物を加え、非在地的と評価し、畿内政権との強い結びつきを指摘した。そして、津

田湾を畿内勢力の讃岐への介入の窓口とし、西方への足がかりとなる海上交通路上の重要な拠点とした（古瀬 1988・2002）。ここにおいて津田湾沿岸の古墳群が非在地的な独自性をもち、それが畿内政権との密接な関わりからなることが指摘されたのである。

統いて國木健司氏は東讃地域に 5 地域の首長墓系譜があったとし、その中で津田湾グループがいち早く在地型を脱却し、4 世紀末～5 世紀初頭には質・量ともに他から傑出した比較的広範囲な政治基盤を形成したとする。そして、富田茶臼山古墳はこれら 5 地域の要衝に築造された古墳であり、津田湾グループにさらに諸勢力の結集を推し進めた大連合首長としての意義をもつと指摘している。また、富田茶臼山古墳が極めて畿内の色彩が強いことから、それは同時に在地勢力の抑圧、駆逐を意味するものと評価している（國木 1990）。氏の指摘は東讃地域の 5 地域から津田湾地域が突出し、さらに富田茶臼山古墳へと発展していく段階的な変化を示した点が重要である。

大久保徹也氏はこうした変化について、初期における多数の小型前方後円墳から段階的に大型化と総数の減少を遂げるとし、築造系譜の淘汰と相互格差の増大を指摘している。そして、その到達点が富田茶臼山古墳の出現としている。また、それは、外部機関＝大和政権への従属を強め同化することで地域的政治秩序の枠組みを維持し階層的編成を貫徹したものと評価している（大久保 2004）。

以上の先史の指摘を踏まえて津田湾沿岸古墳群の歴史的な評価を以下にまとめる。

- ① 海運、停泊、水産を背景に君臨した首長墓である。
  - ② 南海産貝の人手、朝鮮侵略の沿岸拠点、讃岐在地勢力への奉制等を意図した畿内政権との関わりの強い古墳群である。
  - ③ 周辺の政治基盤を結集した広範囲な政治基盤をもつ首長墓であり、後には四国最大の古墳である富田茶臼山古墳の成立に発展していく。
  - ④ 火山石工集団を掌握し、石棺や埋葬施設石材等の生産活動に関わっていた可能性がある。
- この 2 年間にわたる鶴の部山古墳で明らかとなつた事実から問題としたいのが②である。つまり、これまで津田湾沿岸の古墳群の独自性として畿内政権との関わりが注目されてきたことに対して、鶴の部山古墳は墳丘の形態、構造、供獻土器の特徴から極めて在地的な古墳であるという事実である。

墳丘が讃岐の前期古墳に特徴的な積石塚であるということに加え、細長く撥形に聞く前方部をもち、前方部幅の最も狭い部分がくびれ部ではなく、前方部の途中にくるといった形態は北條芳隆氏の指摘した「讃岐型前方後円墳」である（北條 1998）。また、供獻土器は大久保徹也氏が「本地方前期古墳の特徴」と指摘している広口壺であり（大久保 1993）、胎土はさぬき市丸井古墳と類似している。

以上のように在地的な当古墳はさらに、土器や墳丘形態から古墳時代前期初頭つまり、古墳出現期に位置づけられる。このことは現在のところ津田湾沿岸で最初に築造されたということになる。この時期は県内に広く在地的な前方後円墳が認められるが、津田地区においても他地域に遅れることなく在地的な前方後円墳が築造されたことが指摘できる。こうした在地的な古墳が築造された地域に後に畿内との関わりの深い独自性をもつ古墳が築造されるようになる。この変化の内実を検討していくことで、今後より当地域、引いては讃岐古墳文化の変容が明らかになってくる。

なお、こうした在地的な特徴の強い鶴の部山古墳ではあるが、一方で低所に立地し、墳丘用材は持ち運ばれた海浜の大形円礫であるという特殊性は考慮する必要がある。宇垣匡雅氏は集落からの眺望を企図し高所を強く指向する半野部の古墳に対して海へのぞむ古墳は内海航路からの眺望を企図し集落から離れて築かれる傾向にあることを指摘しており（宇垣 2004）、これを鶴の部山古墳の選地要因として考えたならば、在地的要素の中にも津田湾沿岸古墳群としての独自性が既に認められることになり、津田湾沿岸古墳群における鶴の部山古墳の重要性がますます高まってくる。

#### 〈引用・参考文献〉

- 香川県史跡名勝天然記念物会 1928 「赤山古墳」  
『史蹟名勝天然記念物調査報告 第3』  
石野博信編 1995 『全国古墳編年集成』  
岩本正二 1972 「大川郡雨滝山遺跡群について」  
『香川史学2』  
宇垣匡雅 2004 「古墳の立地とはなにか」  
『古墳時代の政治構造』  
梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山古墳の研究』  
1926 『大川郡史』  
大内鬱谷 1922 『津田と鶴羽との遺蹟及び遺物』  
大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』  
大久保徹也 1993 「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について」『財團法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要1』  
大久保徹也 1996 「第5節壺形埴輪」  
『中間西井坪遺跡I』  
大久保徹也 2004 「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』  
香川県教育委員会 1983 『新編香川叢書 考古編』  
木下尚子 1996 「古墳時代南島交易考」  
『考古学雑誌』81-1  
木村義行 1976 「讃岐における積石塚の分布と形態—特に前方後円墳を中心にして」『香川史学9』  
國木健司 1989 「鶴の部山古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度』  
國木健司 1990 「富田茶臼山古墳の意義について」  
『富田茶臼山古墳発掘調査報告書』  
藏本晋司 1995 「香川県三谷石舟古墳の再検討」  
『香川考古 第4号』  
藏本晋司 2003 「四国・北東部地域の前半期古墳における石材利用についての基礎的研究」『関西大学考古学研究室開設五十周年記念 考古学論叢』  
1991 『前方後円墳集成 中・四国編』  
高松市教育委員会 1983 『鶴尾神社4号墳調査報告書』  
四国新聞社 1972 『さぬきの遺跡』  
玉城一枝 1979 「讃岐の前方後円墳」『香川史学10』  
玉城一枝 1985 「讃岐」『季刊考古学 第10号』  
玉城一枝 1985 「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『木永先生米寿記念献呈論文集 乾』  
次山淳 1991 「出土遺物に関する考察」  
『川上・丸井古墳発掘調査報告書』  
津田町教育委員会 1973 『ふる里津田の文化財』  
津田町教育委員会 1959 『津田町史』

- 津田町史編纂委員会 1969『改訂津田町史』  
津田町教育委員会 1986『再訂 津田町史』  
津田町教育委員会 1986『津田町外史』  
寺田貞次 1935「讃岐に於ける前方後円墳」  
　　『考古学雑誌』25－5  
徳島県教育委員会 1983『萩原墳墓群』  
長町與彦 1926『津田町史』  
西川宏・今井亮・是川長・高橋謙・六車忠一・潮見  
浩 1966『瀬戸内』『日本の考古学VI』  
日本考古学協会 1983『香川の前期古墳』  
廣瀬常雄 1983『日本の古代遺跡8 香川』  
古瀬清秀 1988「古墳文化の特質」『香川県史第一  
　　卷 通史編 原始・古代』  
古瀬清秀 2002「岩崎山古墳群について」  
　　『岩崎山4号古墳発掘調査報告書』  
古野徳久 2000「まとめ」『野牛古墳・末3号窓跡』  
北條芳隆 1998「讃岐型前方後円墳の提唱」  
　　『国家形成期の考古学』  
問壁忠彦 1970「沿岸古墳と海上の道」  
　　『古代の日本』4 角川書店  
松浦正一 1953「古墳文化」『新修香川県史』  
六車恵一 1965「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ご  
ろの謎」『文化財協会報7』  
六車恵一 1968「讃岐における古式古墳」  
　　『古代学研究52』  
六車忠一 1978『大川町史』  
森下英治 1997『国分寺六ツ目古墳』  
山元敏裕 1996「長尾町稲荷山古墳探集の土器につ  
いて」『香川考古 第5号』

## 大串石切場跡

### 第1章 調査に至る経緯と経過

#### 第1節 調査に至る経緯と経過

大串石切場跡はさぬき市小田字松ヶ谷 2671-92 に所在する。昨年度から石切場跡の範囲と採石遺構を把握するために地形測量調査を実施している。昨年度は北半分を、今年度は南半分を調査しここに全体像が明らかとなった。

調査はさぬき市教育委員会が主体となり、大川広域行政組合埋蔵文化財係が担当した。地形測量は(株)イビソクに委託した。測量調査期間は平成18年1月30日から2月2日の実働4日間である。

### 第2章 調査の成果

#### 第1節 石切場跡の分布とその範囲について

大串石切場跡は白粉谷と呼ばれる谷地形に立地する。周囲は近世の馬の放牧地や太平洋戦争後の開拓、昭和57年度以降のレジャー施設によって開け、白粉谷は孤立した状態で雑木林として残されている。調査の結果、石切場跡は谷外では認められなかったが、後世の改変、埋没が想定され、断定することはできない。例えば、谷を上がりきった南側は戦後の開拓によるテラスが数段に認められるが、その整地土中には凝灰岩の塊石を多量に確認でき、石切場跡

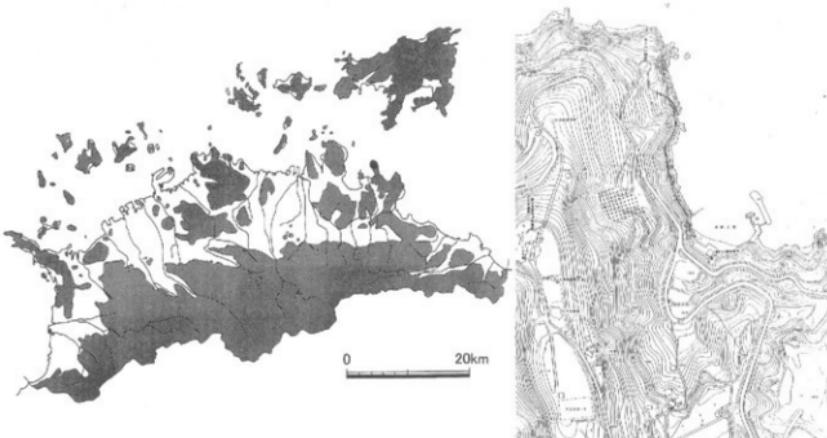
が続いている可能性は十分にある。

また、谷の東側は造成土によるテラス状の平地があり、そのさらに東側は道路がある。西側道路脇は岩を削って傾斜面を形成しているが、この傾斜地には凝灰岩の露頭が認められる。従って、谷の東側も石切場跡が引き続いている可能性はある。道路から東側は谷部がそのまま海に通じている。この谷は比較的海まで移動しやすく、海にまで石を降ろした通路の存在も推察される。ただ、現状では転石や溝状遺構などの遺構は残されていない。

以上から確実に石切場跡と考えられる範囲を示したのが図17である。

白粉谷は谷の中央に一本尾根が張り出しており、この尾根によって二手に谷底は分かれている。石切場跡は谷の両端と中央の尾根上、尾根斜面に認められる。谷奥には石切場跡は確認できないが、谷には多数の集塊岩や安山岩が認められることから、多量の土砂が流入している可能性も否定できない。現状で確認できる石切場跡に対して、北側を第1地点、中央の尾根を第2地点、南側を第3地点とする。

まず、各地点の石切場跡の最高地は第2・第3地点が 71.5 m でほぼ同じである。第1地点が 68.5 m でやや低いがおよそ似通っている。第2地点の 75 m 付近に集塊岩の露頭が認められることから凝灰岩堆積のほぼ上限であることが推察される。一方、最低地はややばらつきが認められる。これに関しては上述したように後世の改変の可能性があるために言及を避けておく。



第14図 遺跡位置図

次に石を降ろした通路が推察されるが、谷底付近にその可能性が高いものの現状ではそれを確認することはできない。

以上、石切造構の現状の範囲について指摘した。以降では各地点の状況について記述するが、最初に、石壁に認められる工具痕について若干触れたい。

## 第2節 工具痕の分類

石切造構には無数の工具痕が残されている。第3地点は保存状態が悪く十分な痕跡を確認できなかつたが、第1・第2地点では良好な痕跡が認められ、その工具痕はおよそ2タイプに分類される。この2タイプを工具痕A、工具痕Bと呼称する。以下ではその特徴を記す。

### 工具痕A

幅4~5cmの方形の痕跡を残す。工具痕Bより幅広い。

### 工具痕B

幅2~3cmで細長い痕跡を残す。石壁には規則正しく一定方向に密に施されている例が多い。場所によつてはジグザク状に方向を変えて施している。

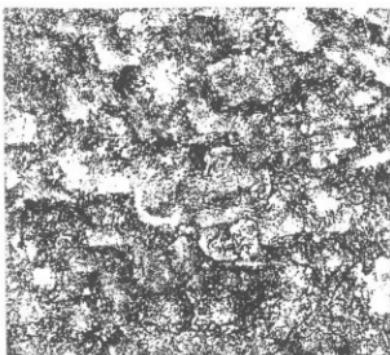
各地点の説明はこの分類名称で呼称する。

## 第3節 各地点の様相

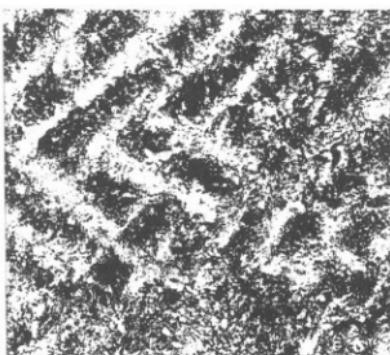
各地点は一定のまとまりや採石方法から第1地点を1~8に、第2地点を1~7に、第3地点を1~3に細分した。以下では各々特徴を記述する。

### 第1-1地点

谷傾斜面に並行して東西40mに渡って認められる。東端の石壁前面で標高約48m、西で51mを測り約3mの比高差がある。東端には長さ50~70cmの塊石の転石が顕著である。東端から10m西地点から石壁の前面にテラスが認められ、最大幅7mを測る。石壁は上下で様相が異なり、上位が垂直に石壁が整形されているのに対して下位はオーバーハンプ気味に奥に入りこんでいる。石壁には3点の木製品が残る。1点は幅80~90cmの区画内の東半分に見られ、カマボコ状を呈する。高さ118cm、幅40cmを測る。向って右側を除き周囲には径3~4cmの円形刺突痕が巡っている。この木製品の左隣も同様の刺突が方形状に巡り、向って右側のみ同じく認められない。左隣には木製品ではなく刺突痕のみが巡ることから製品は無事採石したようである。この木製品の用途は不明であるが、同規模のものを2個製作していること、外側をカマボコ状、内側をほぼ平坦



第15図 工具痕A (1/4)



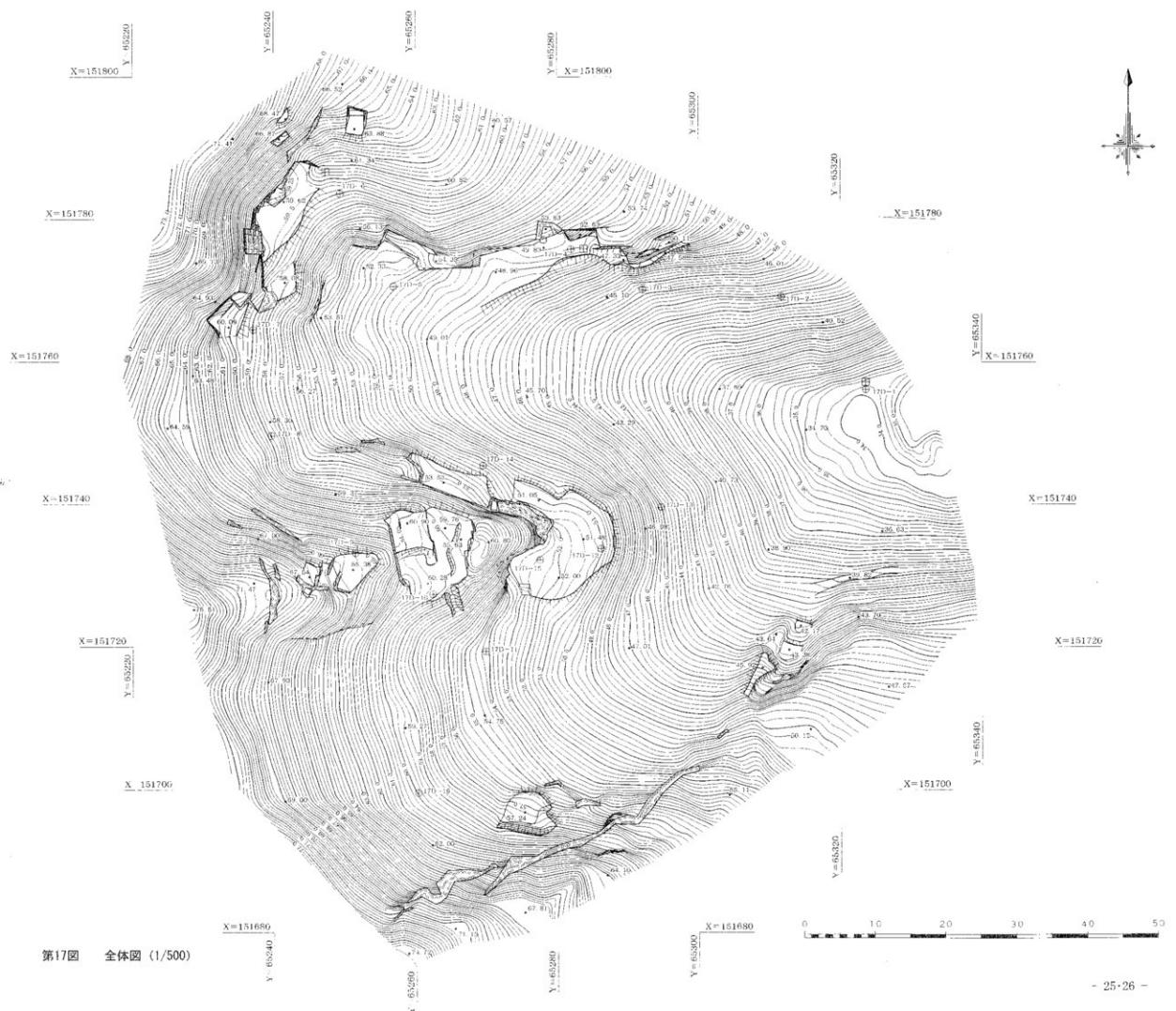
第16図 工具痕B (1/4)

にしている点からは2個は合口を意図したかも知れない。想起されるのは石棺であるが、古墳時代の事例と比較すれば法量が小さく、用途、時期は不明である。

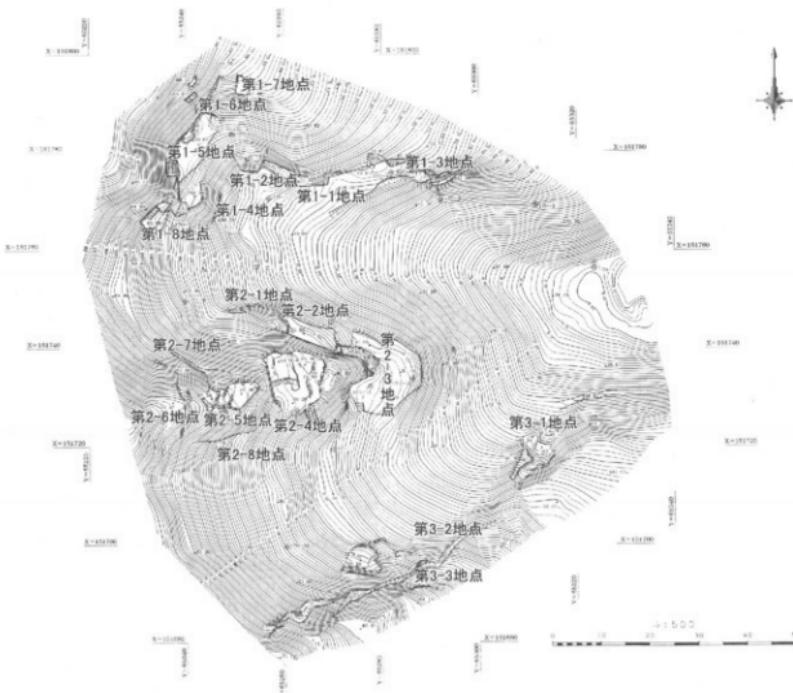
1点は同じく幅106cmの区画内の東側に幅約44cm、高さ40cm以上の方形で確認できる。外側をすぼましている。右側は無事に採石されているが同型であることからやはり合口を意図した可能性がある。

最後の1点は幅37m、高さ44mの長方形で単独で認められる。外側をすぼませている。中世石塔であれば五輪塔の火輪が想定されようが、平面形が長方形を呈する点からは他の可能性も高い。

採石痕は円形、橢円形に搔きとったような痕跡が多く、その大きさにはばらつきがある。中には幅約10cm、高さ40~50cmの縦位の橢円形を横一列に



第17図 全体図 (1/500)



第18図 各地点配置図 (1/1000)

搔き採り、結果として数mの横長の窪みとなつてゐる箇所もある。概して規則的な採石は認められない。

工具痕は大多数が工具痕Aで一部工具痕Bが認められる。

### 第1-2地点

第1-1地点から屈曲して連続して続く石壁である。長さ約10 mで二段となっている。第1-1地点



写真1 第1-1地点未整品

とは一連ではあるが採石状況が大きく異なるために分類した。

石壁は丁寧に調整されており、工具痕Bが認められる。

### 第1-3地点

第1-1地点の上段で部分的に確認できる。石壁は整えられており、第1-1で見られるような製品を割り貫いた痕跡は認められず第1-1地点とは様相が異なる。

### 第1-4地点

地形の傾斜に直交して長さ6 mで認められ、両端は土中に埋没している。石壁は内湾してつよく抉れている。採石状況、工具痕は不明である。

### 第1-5地点

第1-2・4地点から急斜面を5~6 m上がった地点に傾斜に直交して認められる。大串石切場跡では

最も保存状態が良好である。石壁の前面には長さ約15 m、幅約5 mのテラスがあり、その南側は一段下がって再び3~5 mのテラスとなる。

石壁は至る場所が階段状を呈しているが、これは同規格の切石を採石した痕である。切石は長さ80~85 cm、幅40~45 cm、深さ25~30 cmで、幅と深さはそれぞれ石壁の縦に採る場合と奥行きに採る場合があり、それが採石痕の法量差となっている。また、採石痕には矢穴が一部認められ、採石方法の具体像が復元可能である。

工具痕は一面に工具痕Bが認められ、第1-1地点とは全く異なる採石方法が指摘できる。なお、テラスには転石が散在している。

#### 第1-6 地点

第1-5地点北側のやや上位に位置する。石壁は垂直に立ち上がり、面は整えられている。この地点から上位の標高68・67 m地点に長さ約3 mの採石痕がある。規模が小さく試掘坑の可能性がある。なお、この地点が第1地点の最高位となる。

#### 第1-7 地点

第1-6地点の東側に位置し「コ」の字状に採石されている。かろうじて工具痕が認められる。

#### 第1-8 地点

第1-5地点の南端から続く。石壁は長さ約7 mを測り、前面にはテラスが認められる。石切遺構は二段であるが、下段から上段にかけてはスロープ上に石を切り残しており、上段への通路的な役割が推察される。第1-5地点と同法量の切石を採石している。工具痕は工具痕Bを認める。

#### 第2-1 地点

中央尾根の北側傾斜面の傾斜変化点に位置する。長さ約3 mで2ヶ所露出している。東側は下位がオーバーハング気味で、採石痕は土中に埋没していると思われる。西側は西端付近に径約30 cmのビットがみられる。

#### 第2-2 地点

中央尾根北側傾斜面の標高53.5 mに位置する。石壁は直線的に約10 mのび、西は角度を変えて折れそのまま土中に埋没している。西端はオーバーハング気味に傾斜し、工具痕Aが認められる。一方、東側は上下二段となっている。

直線的な石壁部分は採石痕から切石の採石が推測され、その規格は第1-5地点と同様である。また、工具痕Bが認められる。石壁の前面には長さ10 m、幅3 mのテラスがあり、テラス東端付近に切石、塊石状の転石が積まれた状態でためられている。この切石の転石は採石痕と同規格で工具痕Bが認められる。



写真2・3 第2-2地点転石

#### 第2-3 地点

中央尾根先端を取り囲むように確認できる。標高51~52 mに位置し、第2地点では最下位に位置する。第2-2地点からは約1 m下がってテラスが展開する。石壁はオーバーハングし、不規則に円形または梢円形の掻き採りが認められる。また、幅16 cm、高さ25 cmの梢円形の掻き採りが横一列に並んだ箇所や、径10 cm程度の小穴が無数に確認できる。さらに、工具によって長方形の輪郭を入れている箇所が2ヶ所ある。

総じて採石された製品の種類や採石方法は第1-1地点とほぼ同じである。工具痕Aを認める。

石壁の前面には尾根を取り囲むようにテラスが認められる。幅は先端部で約10 m、北南両端で4~

7 mを測る。テラス北側では一部後世の改変により削られている箇所があり、テラスの内部を窺うことができる。それによると内部には径5~10 cmの栗石上の凝灰岩塊石が敷き詰められており、テラス面の整地が想定される。テラス南西端には塊石の転石が集中して認められる。

#### 第2-4 地点

中央尾根上、第2-3地点の上位に位置し、標高約59.5~61 mを測る。この地点は10×12 mの曲輪状のスペースを有する。採石は全て切石で、第1-5地点と同規格である。工具痕はすべて工具痕Bである。西端は垂直な石壁が長さ10 mで認められる。テラス北西部は一段上がっており、下段からスロープした通路が認められる。テラス東端は南から北にかけて階段状に石壁が広がり長さは7~8 mを測る。そのさらに東は自然地形が若干高くなっているが、右切構造は認められない。テラス南側の尾根傾斜面には幅2 mの溝状遺構が長さ4 mに認められる。石材を降ろした溝の可能性がある。

#### 第2-5 地点

第2-4地点からさらに約5 m上がった地点に位置する。東西に4段あり、東から西に向くなっている。東西12 m、南北4~5 mの曲輪状を呈する。東端のテラスで標高65.3 m、西端のテラスで標高67.5 mを測る。

石壁は各段西から南にかけて「L」字状に認められる。採石痕から切石を採ったものと思われ、全て工具痕Bである。

#### 第2-6 地点

中央尾根上の最上位である。標高69~71.5 mを測る。尾根に直交して凝灰岩の露頭が認められるが、採石痕は不明瞭である。露頭には南北に亀裂が認められるが、自然か人工か判然としない。露頭前面のテラスも不分明である。

#### 第2-7 地点

第2-9地点から北に下った尾根傾斜面に位置するが、採石の状況は不明瞭である。

#### 第2-8 地点

中央尾根南側傾斜面に位置し、傾斜に並行して長さ約11 m認められる。西端と東端はそのまま土中に埋没するが、露出部分での標高差は5~6 mを測る。石壁はオーバーハングしており、採石痕の大部

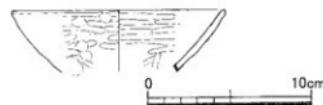
分は土中に埋没しているものと思われる。

#### 第3-1 地点

第3地点の最下位に位置する。南側傾斜面に長さ約7 mで認められ、両端は土中に埋没している。石壁の前面は幅2 mの溝が傾斜に並行しており、溝底には凝灰岩を主体とした径約10 cmの小礫が多く認められ、その中から瓦器碗の口縁部が表採されている。瓦器碗は口径13 cmを有する。色調は灰黄色を呈し、やや酸化焼成氣味である。外面には幅約3~4 mmの太いヘラミガキ、指押さえが見られ、内面はヘラミガキが認められる。口縁部は丸く取られ、内面端部に沈線は認められない。時期は13世紀前半が想定できる(註1)。

溝の北側は土壌状の地形の高まりがあるが、凝灰岩は露出しておらず、採石遺構か単なる地形の削り残しか判断できない。溝の東は幅2~3 mのテラスが二段認められる。テラスから東には谷を降りる小道が残っており、この道を利用して石を降ろした可能性があるが、先は開墾による改変によって海までのルートは確認できていない。

地点内には1~1.7 mの転石が散在している。また、テラス付近の木にワイヤー、溝内には丸太があり、近年の採石に伴う遺構である可能性があり、注目される。



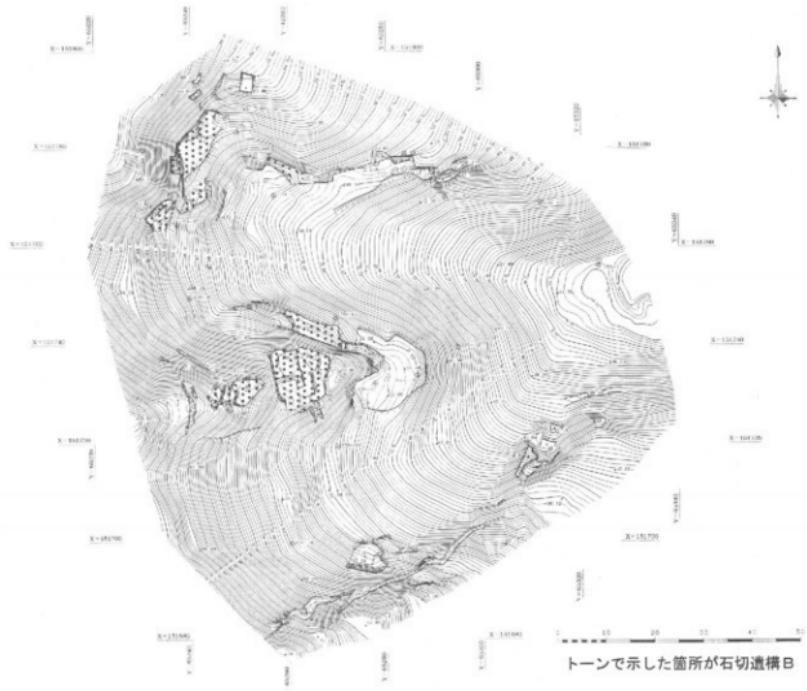
第19図 採集瓦器碗 (1/3)

#### 第3-2 地点

谷南端に傾斜に並行して認められる。西端は第3地点の最上位となり、標高71.5 mを測る。石壁は途中屈曲し、またくい違ながら全長48 mを測る。局所的にオーバーハングを確認できるが、保存状態が悪く工具痕は確認することができない。

石壁の前面には第1地点のようなテラスは確認できないが、転石は散在している。また、中央付近は石壁の前面にさらに石壁や地形を形成した段が認められ、かつては石壁前面に段状のテラスが存在した可能性がある。

石壁の上方は花崗岩質の部分もあり凝灰岩の質はあまりよくない。



第20図 石切遺構Bの広がり (1/1000)

### 第3-3 地点

第3-2地点中央付近の上段に位置する。長さ4m部分が露出し、そのまま土内に埋没している。石壁は矩形に屈曲し、工具痕Aを認める。

## 第3章 まとめ

### 第1節 石切遺構の分類と特徴

これまでに各地点の石切の様子を見てきたが、目的とする採石対象物、採石方法から石切遺構は大きく二つに分類されることを指摘したい。

まず、一つは石壁に円形、楕円形の採石痕が認められる石切遺構である。このタイプの特徴は石壁がオーバーハングし、採石は不規則である。また、石壁には途中で採石を中断した未製品が認められ、それを観察するとおおよその製品の形で採石していることが指摘できる。採石目的とする製品は採石痕の形状からさまざまである。そして、この石切遺構には工具痕Aが顕著に認められる。以上の特徴をもつ石切遺構を石切遺構Aとする。

これに対して、もう一つの石切遺構は切石の採石を専らとしている。切石の規格は長さ80~85cm、幅40~45cm、深さ25~30cmである。この石切遺

構の採石方法は整然と効率よく行なわれており、結果として石壁は垂直に切られ、前面に工具痕Bによる壁面調整がなされている。また、この石切造構では矢穴も確認されている。これを石切造構Bとする。

石切造構Bの立地を全体図の中で示したのが図20である。概して石切造構Bの方が標高上位に比較的まとまって位置しているといえよう。

以上、この両者の石切造構が目的とする採石対象物や採石方法の異なることを明らかにしたが、問題はこの両者が同時期か時期差が想定されるのである。現段階では時期差となる可能性が高いと推察しているが、その根拠については紙幅の都合上稿を改めることとする。

## 第2節 石切場跡の時期について

文献から石切場の採石時期を知る資料として「建武回録記」がある。

暦応二年八月四日

宝前幣殿拝殿切石等被居之、今度即任先例、田中殿御領讃岐国鶴部庄被召之

この古文献からは1338年に讃岐国鶴部庄から京都府石清水八幡宮に切石が運ばれたことがわかる。鶴部庄には馬ヶ鼻石切場跡も含まれることから、大串石切場跡から運ばれたと断定するには至らないが、有力な候補地の一つである。

次に採石方法や工具痕として、直接石壁から製品に近い形で採石している点では坂出市岩屋寺中世石切場跡に類似し、工具痕Aからは同じく坂出市岩屋寺石切場跡や八栗寺石切場跡、火山西教寺奥の院石切場跡に類似する。坂出市岩屋寺石切場跡からは中世後半の石造物の未製品が認められ、八栗寺石切場跡からは古代末から中世前半の磨崖五輪塔が、火山西教寺奥の院石切場跡からは古代末の磨崖仏がある。大串石切場跡の未製品には現在のところ、時期を判断できるものはないが、中世段階にまで採石活動がさかがほる可能性は高い。

そして、今回の調査で大きな成果となったのは瓦器碗が採集されたことである。形態的特徴から13世紀前半が想定される。つまり、「建武回録記」からおよそ100年前に採石活動をしていたことが明らかになった。「建武回録記」には「任先例（先例に任せて）」とあるが、この土器の採集によって「建武回録記」以前の採石活動が証明されたのである。そしてさらに興味深いのがこの土器が瓦器碗ということである。瓦器碗は讃岐外の製品である可能性もあり、今後この土器の产地が明らかになれば、大串

石切場跡で採石された石材の流通関係についても言及することが可能となる。

（註1） 片桐孝浩氏からご教示を得た。

## ＜参考文献＞

岡村信男 1989『志度の地名史』

讃岐石造物研究会 2002「讃岐の凝灰岩採石遺跡」

『文化財協会報』平成13年度特別号

柏徹哉、松田朝由 2002「香川県に分布する凝灰岩

石造物の概要』『二上山凝灰岩の石  
切場と石造物—生産地と消費地—』

遠藤亮 2002「志度地域 中世採石場と石造物」

『郷土誌 志度』第18号

六車忠一 2003「讃岐の石切場遺跡」

『香川県史学』30号

遠藤亮 2003「さぬき市志度町 大串石切場遺跡」

『香川県史学』30号

遠藤亮 2005「中世・讃岐の石切場」

『中世讃岐の石の世界』

## 第2章 確認調査の成果について

### 一つ山古墳

#### 第1章 はじめに

一つ山古墳は津田湾を半月状に取り囲んだ、南下側の突出部にある鶴部岬の一隅をしめる丘陵上に所在する。昨年度から確認調査を実施している、鶴の部山古墳からは北東方向に約600m離れたところにあり、その木立を視認できる。現状では陸繫島となっており南北に瓢箪のように細長く、それぞれ小頂部をもった独立状丘陵を呈している。本古墳はこの南側小頂部に築かれており、標高は約32mで西側低地との比高は30mを測る。東岸は直接海に面しており、波濤のため切り立った急崖となっている。

これまでところ本古墳について知ることのできる内容は、少なく斯片的なものといえる。古くは明治年間に盗掘され、鏡や鉄刀、人骨・朱などが出土したことが伝えられ、大正時代にはおむね現在に近い状況であったことが推測される。その後の踏査などによる記録でも、墳丘は直径が10~20m、高さは最大3mを測り葺石がみられ、その一部には砂利が含まれているといった指摘がなされているにすぎない。埋葬施設についても箱式石棺との記述が伝えられ、一部棺材が運び出されたとされる。遺物についても盗掘以外のものは知られておらず、それも確認できる資料は皆無で実相は不明である。このように資料的な制約もあって、一つ山古墳については特色のある津田湾岸古墳群内における位置づけにおいても、ほとんど等閑に付されていたといえる。今回の一つ山古墳の確認調査は主に昨年来さぬき市教育委員会が実施している、津田湾岸に所在する前期古墳群に関連する様相把握の一環とするものである。

調査は平成17年11月1日より着手し、丘陵頂部を中心に周囲の伐採を行ったものである。なお、一つ山には近世後期以降に「二十四輩さん」が祀られ石造物が造立されている。丘陵の北から南に巡回できるようになっており、歩道も改修されている。そのため歩道部分をのぞく範囲は、草木が繁茂した状況であった。伐採後は20cm等高線で地形測量にとりかかり、ついで必要と判断した墳丘北側・北東側及び墳頂部の3カ所にトレーニングを設定したものである。

伐採後の地表状況を観察すると、頂部はほぼ平坦となり石造物の一つが置かれている。歩道は丘陵稜線を南北に通りぬけ、踏石などではやや掘込みがみられる。斜面には木株などの凸凹ほか、円錐の散布もみられた。地形測量によると等高線は全体的に弧状にめぐっている。標高31.9mを高所とし、31mまでは緩やかといえるが、これより下はやや勾配をなすものである。また、29mを挟んで前後に傾斜変化があり緩やかとなる。これは現地でも確認できるものである。これらから丘陵の旧地形や改変の影響はあるものの、標高29m付近を墳頂とし円形を呈する高さ約3mの墳丘が想定された。

次に墳丘北側斜面に設定した1トレーニングは長さ約12mを測るもので、標高約29.6mと約28.2mの上下2カ所にて、石礫の集中する範囲を検出した。これら2カ所の間は丘陵地山の岩盤やバイラン質の基盤土となっており、だいたい拳大かやや大きいくらいの亜円礫を主としている。礫の配置に明確な並びは確認されないが、上段では下端にこれまでに指摘のあった細礫を密に含んだ上を基盤土上に敷き、円礫を置いている状況が看取された。下段については検出時の状況では、傾斜に沿って中程の細礫を含む土を挟み込むように、上下に礫のまとまりがみられた。疊は掘り込んだ岩盤土に累積しており、これらと一緒に墳丘に配置された壺形埴輪の破片が岩盤直上からも出土している。これらからして上段については葺石として部分的に指摘できる余地はあるが、下段については転落したものまた別のものとも明確にしがたい。下段礫層から下ると平坦状地形が1m幅ほどあり、それより北側は急斜面となっている。

墳頂部の2トレーニングは測量図から推定復元した墳丘中心を通り、磁化に平行するように設定したものである。トレーニングは現況での頂部平坦面から北側傾斜をふくみ、傾斜部分にて盛土を確認した。1トレーニングの南端と平行するくらいの位置から基盤土が水平状に削平され、小礫混じり青灰色土や基盤土バイラン土などを現状で1mほど盛っている。また、中央平坦部では地表下数センチで板状安山岩多數とともに、刺抜式石棺とおもわれるものを検出した。肉眼観察では地元火山産白色凝灰岩製で、長軸を南北一北西に向け埋まっているものとおもわれる。この西側には細部は不明だが同じく白色凝灰岩がみられる。

今回の調査から一つ山古墳は直径25m前後の円

墳で、葺石や壺形埴輪を配していたことが窺われる。時期は出土した壺形埴輪からすると古墳時代前期後半におさまるものである。市内で火山産白色凝灰岩製剝抜式石棺が確認されたのは赤山古墳・岩崎山4号墳につづく3例目となり、今後の津田湾岸古墳群の展開とその社会関係などについて再考を促すものである。

＜参考文献＞

- 『再訂津田町史』1986 津田町史編集委員会・津田町  
六車恵一「讃岐津田湾をめぐる四、五世紀ごろの謎」  
『文化財協会報特別号7』1965 香川県文化財保護協会





1 トレンチ 6 上層（西から）



2 トレンチ 6 下層（西から）



3 トレンチ 9 全景（北から）

図版2



1 トレンチ7 全景（西から）



2 トレンチ8 全景（南から）



1 トレンチ8 断ち割り状況（南から）



2 トレンチ8 断面（東から）



3 トレンチ8 南端（南から）



4 トレンチ8 断面（西から）

図版4



1 第2-4地点（東から）



2 第2-4地点（西から）



1 第2-5地点（東から）

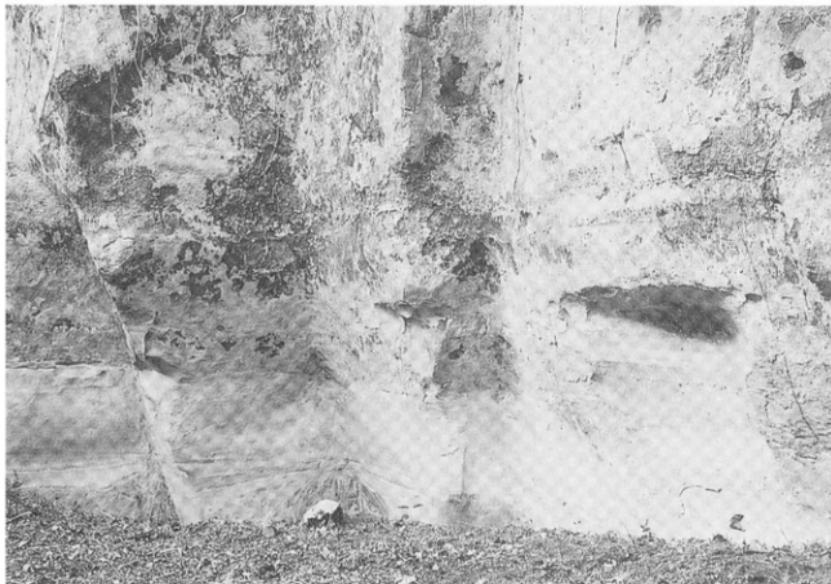


2 第2-3地点（東から）

图版6



1 第3-2地点（北から）



2 第2-3地点



1. 調査前状況（北から）



2. 調査前状況（墳頂部・南から）



3. 伐開後状況（西側斜面・北から）



4. 1 トレンチ検出状況（北から）



5. 上段石礫検出状況（北東から）



6. 下段石礫検出状況（北西から）



7. 下段石礫断割状況（西から）



8. 2 トレンチ中央検出状況（西から）



報告書抄録

ふりがな	うのべやまこふん・おおぐしいしきりばあと・ひとつやまこふん
書名	鶴の部山古墳・大串石切場跡・一つ山古墳
副書名	平成17年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	さぬき市埋蔵文化財調査報告書 第3集
編著者名	阿河鏡二・松田朝由
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係
発行機関	さぬき市教育委員会
所在地	〒769-2192 香川県さぬき市津田町津田138-15 TEL0879-42-3107
発行年月日	西暦 2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'."	東経 。'."	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
鶴の部山古墳	香川県さぬき市津田町鶴羽部1483-1	372064		34° 17' 10"	134° 16' 05"	2005.10.12 ~ 2005.11.15	市内遺跡確認調査
大串石切場跡	香川県さぬき市小田字松ヶ谷2671-92	372064		34° 26' 45"	134° 12' 45"	2006.1.30 ~ 2006.2.2	市内遺跡確認調査
一つ山古墳	香川県さぬき市津田町鶴羽1548	372064		34° 17' 23"	134° 16' 20"	2005.11.1 ~ 2006.3.21	市内遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
鶴の部山古墳	古墳	古墳・前期	古墳	広口壺・近世陶器・土錐			積石の状況から古墳の形態、法量が判明した。
大串石切場跡	生産	中世	石壁、工具痕、採掘痕	瓦器碗片			石切場遺構の全体像が明らかになる。
一つ山古墳	古墳	古墳・前期	削抜式石棺、葺石	扇形埴輪			直徑25m前後の円墳で埋葬主体に火山灰白色凝灰岩製の削抜式石棺をもつ。前方後円墳以外では県内初例。

平成17年度国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鶴の部山古墳

大串石切場跡

一つ山古墳

2006年3月

編集 大川広域行政組合

発行 さぬき市教育委員会

〒769-2492 香川県さぬき市津田町津田138-15

電話 (0879) 42-3107

印刷 ナカハタ印刷株式会社